山形県埋蔵文化財調査報告書　第64集

農林事業関係遺跡(2)

発掘調査報告書

1983

山形県教育委員会

後田（うしろだ）遺跡
俵田（たわらだ）遺跡（第1次）

発掘調査報告書

昭和58年3月
山形県教育委員会

序

本報告書は，山形県教育委員会が山形県農林部の委託を受けて，昭和53・54年度に実施した後田遺跡ほか１遺跡の発掘調査の成果をまとめたものであります。

出羽富士「鳥海山」を北に仰ぐ庄内平野は，日本でも屈指の穀倉地帯であり，長年にわたり人々が生産の向上をめざして農業を営んでこられたところであります。昭和40年代の後半から着手された農村基盤総合整備パイロット事業（庄内地区）もそのご努力の一環であり，現在付近の水田は三反歩一枚の近代的ほ場として急速に変貌しつつあります。

またこの地一帯は，国指定史跡として古代出羽国の国府に擬定されている「城輪柵跡」をはじめ，古代の建築部材を埋設している「堂の前遺跡」など，平安時代を主とした埋蔵文化財の宝庫でもあります。貴重な先人の文化遺産を保護し活用するとともに未来へ伝えてゆくことは，現代に生きる私どもの責務であります。県教育委員会においては，生活文化の向上と地域環境の整備という観点から，今後とも文化財保護のために努力を続けてまいる所在であります。本書が埋蔵文化財に対する保護思想の普及もかねて，皆さまのご理解の一助となれば幸いと存じます。

最後に，調査にあたって多大な御協力をいただいた関係各位に，心から感謝を申し上げます。

昭和58年３月

山形県教育委員会
教育長　　大　竹　正　治

例　　言

1　本報告書は，山形県教育委員会が昭和53・54年に実施した，農村基盤総合整備パイロット事業（庄内地区）に関連する後田遺跡と俵田遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2　本報告書における俵田遺跡の報告については概報にとどめ，遺構・遺物の詳細は昭和58年度俵田遺跡第２次発掘調査報告書に記載する。

3　挿図縮尺は，建物跡については１／120，井戸跡については１／20，土壙については1/40を原則とし，各々にスケールを示した。遺物挿図・遺物図版については1／3，1／6を原則とした。一部異るものもあるが，その場合は縮尺値を記入してある。遺物のうち断面を黒く塗りつぶしてあるものは須恵器を表している。

挿図中の遺構の略記号は，ＳＢ―建物跡，ＳＡ―柱列ないし板列，ＳＥ―井戸跡，ＳＫ―土壙，ＳＤ―溝状遺構，ＥＢ―建物跡を構成する柱穴，ＥＰ―その他の柱穴とした。遺構番号は各遺跡毎に１から始まり，後田遺跡については１次調査を1から600番，２次調査を601番から始まる一連番号とした。

表中の遺物計測値のうち，（　）内の数字は図上復元による推定値である。

4　調査は山形県教育委員会が主体となり，山形県教育庁文化課の下記職員が担当した。

後田遺跡１次調査　　佐藤庄一・手塚　孝・尾形與典
後田遺跡２次調査　　佐々木洋治・大類　誠・尾形與典
俵田遺跡　　佐藤庄一・手塚　孝・尾形與典

5　本報告書の作成は，山形県教育庁庄内教育事務所埋蔵文化財分室があたり，佐藤庄一・野尻　侃・安部　実が担当・執筆した。編集は野尻　侃，写真図版は安部　実があたり全体を佐藤庄一が総括した。実測図や挿図・表の作成については，庄司　功・吉村加代子・阿部弥生・小池敏美・水落みち子がこれを補助した。

6　調査に際しては，山形県農林部・八幡町教育委員会など関係諸機関の協力を得た。

目　次

序
例　言
Ⅰ　立地と環境……1
Ⅱ　後田遺跡
1　調査の概要……2
（1）調査の経過……2
（2）遺跡の層序……4
2　遺　構……5
（1）建物跡・柱列……5
（2）井戸跡……11
（3）土　壙……12
（4）その他の遺構……14
3　遺　物……16
（1）建物跡出土の土器……16
（2）井戸跡出土の遺物……17
（3）土壙出土の遺物……19
（4）溝状遺構出土の土器……25
（5）墨書・ヘラ描文字土器……28
（6）その他の遺物……28
Ⅲ　俵田遺跡
1　調査の経過……32
2　遺構と遺物……32
Ⅳ　まとめ……34

付　表

表1　掘立柱建物跡出土土器……17
表2　ＳＥ18･210井戸跡出土土器……17
表3　ＳＫ441土壙出土土器……19
表4　土壙出土土器……19
表5　ＳＫ602土壙出土土器……22
表6　土壙出土土器……25
表7　溝状遺構出土土器……25
表8　墨書・ヘラ描文字土器……28
表9　その他の遺物……28

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置・分布図…… 1
第２図　後田遺跡グリッド配置図…… 3
第３図　土層図…… 4
第４図　２次調査遺構配置図…… 5
第５図　１次調査遺構配置図…… 6
第６図　ＳＢ14・201・202建物跡・ＳＡ15柱列…… 7
第７図　ＳＢ459・484建物跡…… 8
第８図　ＳＢ438・439・444・482・483建物跡・ＳＡ443柱列…… 9
第９図　ＳＢ604・650建物跡・ＳＡ622柱列……10
第10図　ＳＥ210井戸跡……11
第11図　ＳＥ18井戸跡……13
第12図　ＳＫ25・148・209・602・629・632土壙……15
第13図　堀立柱建物跡出土土器……16
第14図　ＳＥ18・210井戸跡出土土器…18
第15図　ＳＫ441土壙出土土器……20
第16図　土壙出土土器……21
第17図　ＳＫ602土壙出土赤焼土器プロフィール図……22
第18図　ＳＫ602土壙出土土器……24
第19図　土壙出土土器……26
第20図　溝状遺構出土土器……27
第21図　墨書・ヘラ描文字土器……29
第22図　その他の遺物……30
第23図　木製品……31
第24図　俵田遺跡グリッド配置図……33

図　版　目　次

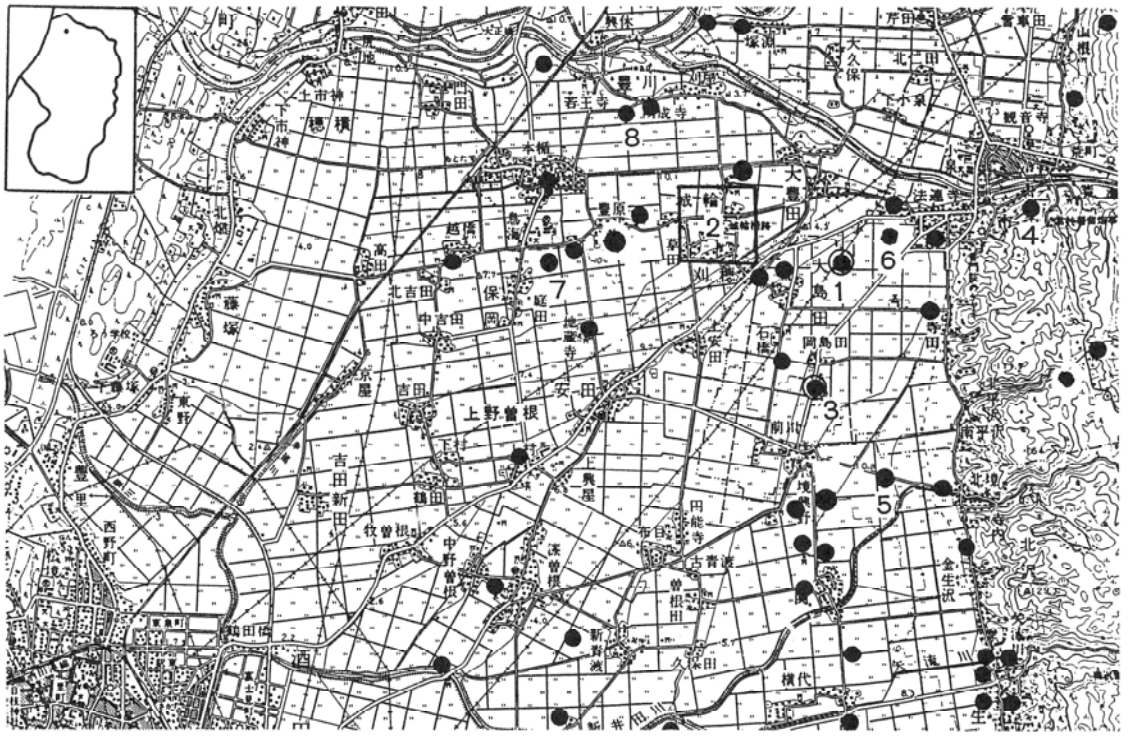
図版１　後田遺跡遠景・１次調査精査区全景・１次調査精査区近景
図版２　２次調査発掘風景・２次調査精査区全景・２次調査土層断面
図版３　ＳＢ444建物跡・ＳＢ203建物跡・ＳＢ438・439建物跡・ＳＡ204板列
図版４　ＳＢ14・201建物跡・ＳＢ482・483建物跡・ＳＢ459・484建物跡
図版５　ＳＥ18井戸跡
図版６　ＳＥ210井戸跡・ＳＫ19土壙
図版７　ＳＫ441・209土壙・ＳＤ235溝状遺構
図版８　ＳＫ602・632・680土壙
図版９　後田遺跡・掘立柱建物跡出土土器
図版10　ＳＥ18・210井戸跡出土土器
図版11　ＳＫ441土壙出土土器
図版12　土壙出土土器
図版13　ＳＫ602土壙出土土器（１）
図版14　ＳＫ602土壙出土土器（２）
図版15　土壙出土土器
図版16　溝状遺構出土土器
図版17　墨書・ヘラ描文字・漆付着土器
図版18　その他の遺物
図版19　木製品・布・漆塊・種子
図版20　俵田遺跡遠景・中央区遺構検出状況・中央区遺物出土状況
図版21　北区面整理状況・西区発掘状況・火切臼出土状況
図版22　ＳＴ１住居跡

Ⅰ　立地と環境

日本有数の大河である最上川は，庄内平野を刻みこむように緩やかな曲流を示しつつ西下し，日本海に注いでいる。飽海地方ともよばれる庄内平野の北半部の地形は，大きく東から（１）出羽丘陵，（２）庄内北部河間低地，（３）酒田北部三角洲，（４）庄内北部砂丘の４つに分けられる。庄内北部河間低地は，さらに自然堤防・後背湿地・狭義の河間低地の３つに細分される。

平安時代の遺跡の大半は，狭義の河間低地上に立地し，自然堤防上にある遺跡は酒田市城輪柵跡と同大槻新田遺跡の２例だけである。本書で報告する八幡町後田遺跡・同俵田遺跡も標高10～15ｍの狭義の河間低地上に立地する。各遺跡を覆う表層の地質は，粗砂とシルトおよび粘土からなる沖積層で，かなりグライ土壌化が進んでいる。

後田遺跡の西方750ｍには平安時代の出羽国府と推定される国指定史跡城輪柵跡があり，その東西主軸線延長上に，八幡町八森遺跡・同堂の前遺跡・酒田市庭田遺跡などの重要な遺跡が分布する（第１図）。堂の前遺跡はまだ確証に乏しいが出羽国分寺の可能性があり，八森遺跡についても「三代実録」仁和三年条による「旧府近側高敞之地」の説がある。



1.後田遺跡　2.城輪柵跡　3.俵田遺跡　4.八森遺跡
5.上ノ田遺跡　6.堂の前遺跡　7.庭田遺跡　8.明成寺遺跡

第１図　遺跡位置・分布図（１：75,000）

II　後田遺跡

1　調査の概要

（1）調査の経過（第２図，図版１・２）

後田遺跡は，山形県飽海郡八幡町大字政所（まんどころ）字後田および遠沖に所在し，政所部落北東部に位置する。地元の人々の間では古くから土器などが出土することで知られていたが，正式には山形県教育委員会が昭和48年に実施した庄内広域営農団地農道整備事業の分布調査によって確認されたものである。遺跡の範囲は，遺物の散布状況や試掘調査の内容から，東西240ｍ，南北300ｍに及び，東端が堂の前遺跡に接するものと推定される。

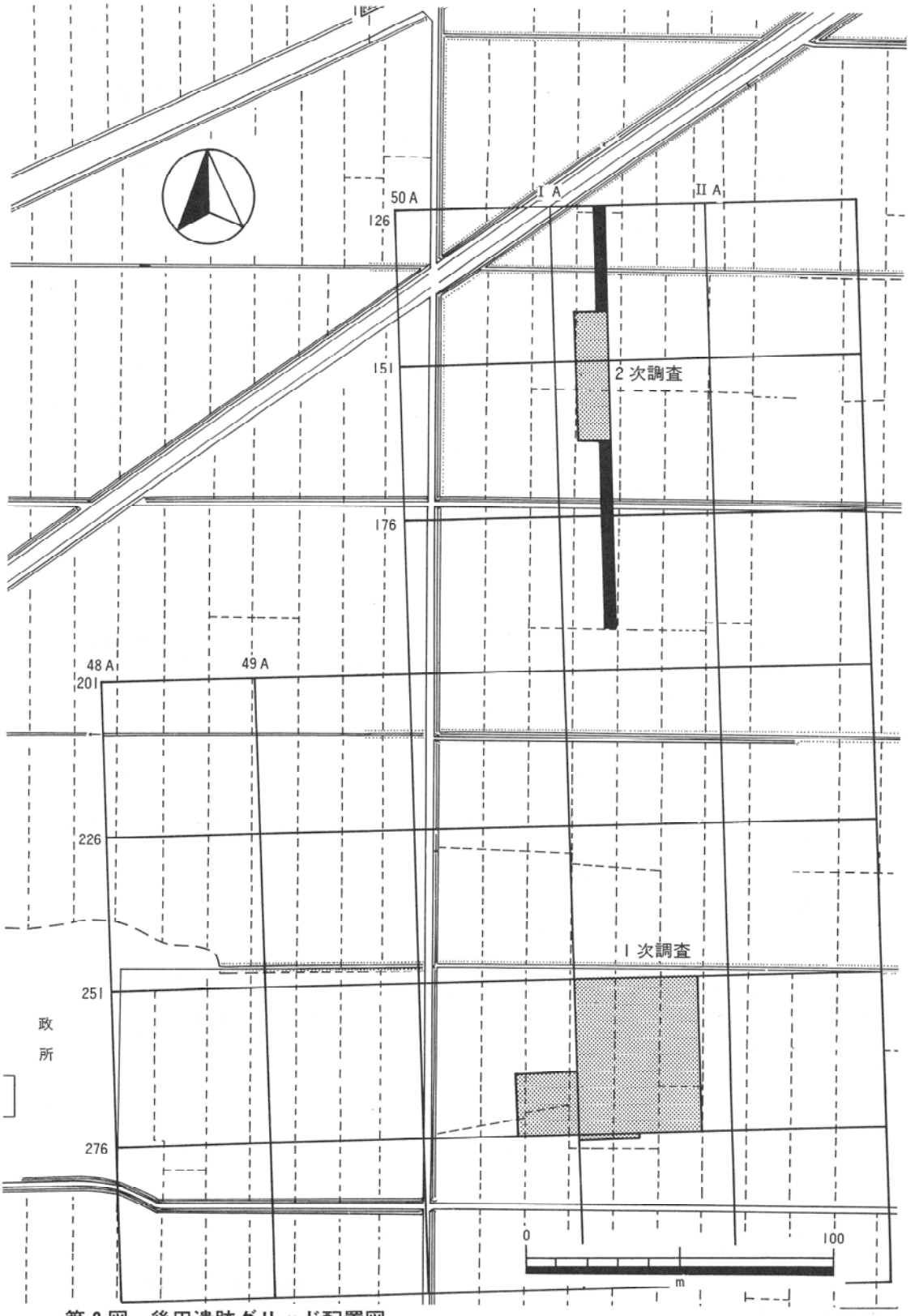
地形的には庄内北部河間低地域にあたり，標高14～15ｍの微高地上に立地する。地目はほとんど水田であるが，一部道路敷や用排水路も含まれる。

この地域に昭和53・54年に農村基盤総合整備パイロット事業（庄内地区）がかかることになったため，県教育委員会が県農林部など関係諸機関と協議の結果，パイロット事業の施工年次に合わせ，事前に緊急発掘調査を実施することになったものである。調査は山形県教育委員会が主体になり，八幡町教育委員会の協力を得て，昭和53年５月29日から同年８月13日までと，昭和54年４月23日から同年６月14日までの２次にわたり実施した。昭和53年度の１次調査は遺跡の南半約36,000㎡を対象にしたもので、実質54日間で延べ3,140㎡を発掘した。昭和54年度の２次調査は遺跡の北半約18,000㎡を対象にしたもので，実質33日間で延べ856㎡を発掘した。

発掘区の地区割りは，東隣りにあたる堂の前遺跡の座標軸をそのまま延長して使用した。南北方向は，起点から南に２ｍ毎に１・２・３……299・300区とし，東西方向は，起点から東へ50ｍごとにＩ・II・III，西へ50ｍ毎に50・49・48の大区を設け，それぞれをさらに２ｍ毎に区割りして，西から東へＡ・Ｂ・Ｃ……Ｙ区とした。これらの呼称は，２ｍ四方のグリッドを単位として行ない，たとえばIIＡ251区，49Ｄ226区と表している。なお南北基準線の方位は真北に合せている。

１・２次調査とも最初調査対象地区全体にほぼ25ｍ毎に１ｍないし２ｍ四方の坪掘りを行ない，遺構や遺物の分布状況を調べ，つぎにその濃密個所を精査地区として選定している。１次調査では，精査地区の東半部（ＩＡ～ＩＴ—251～277Ｇ）に，掘立柱建物跡12棟，倉庫跡１棟，井戸跡２基，土壙26基，溝状遺構などが密集して検出された。

２次調査では，精査地区の北半部（ＩＤ～ＩＩ—143～162Ｇ）に，掘立柱建物跡２棟，土壙15基，溝状遺構などが密集して検出された。２次調査精査地区は，１次調査精査地区の北方174ｍの地区にあたる。



第 2 図　後田遺跡グリッド配置図

（２）遺跡の層序（第３図，図版２）

本遺跡の基本的な層序は，１次調査精査地区北端部と中央部の東西壁，２次調査精査地区東端部の南北壁によって観察した。遺跡付近の地層は北東から南西にかけて緩傾斜する。

第Ⅰ層　茶褐色微砂　水田の耕作土で砂分を含み，20～30cmの厚さで堆積する。第Ⅱ層との境界に厚さ３cm前後の滞水層をもつ。

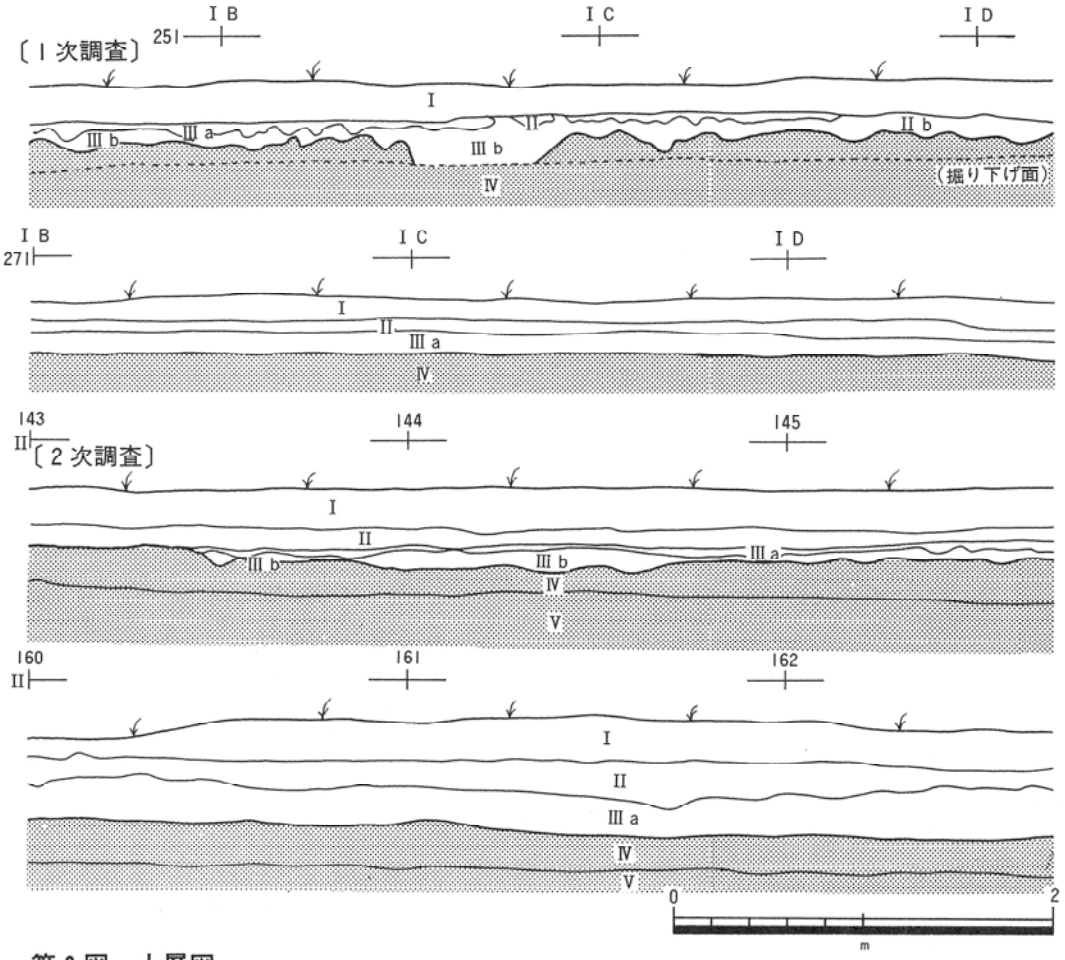
第Ⅱ層　褐色砂質土　炭化粒子と遺物を少量含み，10～30cmの厚さで堆積する。

第Ⅲa層　黒褐色粘質土　炭化粒子と遺物を多く含む，平安時代の遺物包含層である。厚さは５～25cmで北にいくほど深くなる。

第Ⅲb層　暗褐色粘質土　炭化粒子と遺物を少量含み，硬くしまっている。遺構の検出地域に部分的に５～30cm堆積しているもので，整地層と思われる。

第Ⅵ層　黄褐色粘質土　部分的に青灰色を呈し遺物は含まない。遺構の壁や底面をなす。

第Ⅴ層　青灰色シルト　色調は全体的に青灰色を呈し，第Ⅳ層に比べ砂分を多く含む。



第３図　土層図

2　遺　構（第４・５図）

１・２次調査で検出された遺構には，掘立柱建物跡14棟，倉庫跡１棟，掘立柱列３列，井戸跡２基，土壙41基，溝状遺構などがある。とくに１次調査の精査地区に遺構が多い。

（１）建物跡・柱列（第６～９図、図版３・４）

ＳＢ14建物跡（第６図）　１次調査ＩＡ～ＩＦ―258～262Ｇで検出された梁行２間，桁行４間の掘立柱建物跡である。東西両面に庇がつき，南北主軸方位は真北を基準としてＮ―６°20′―Ｗである。身舎の梁行長は3.6ｍ，桁行長は8.4ｍを測る。柱間距離は，各桁行が2.1ｍ（約７尺）等間，身舎梁行南面ＥＢ110・513・514が1.8ｍ（約６尺）である。東西両面庇の身舎からの幅は1.8ｍ（６尺）である。

柱穴掘り方は，径45～75cmの円形ないし楕円形を呈し，検出面からの深さが40cm前後を測る。堀り方部の埋土は暗灰褐色シルトを基調とし，柱アタリ部の埋土は炭化粒子を多く含む黒灰褐色微砂質粘土である。

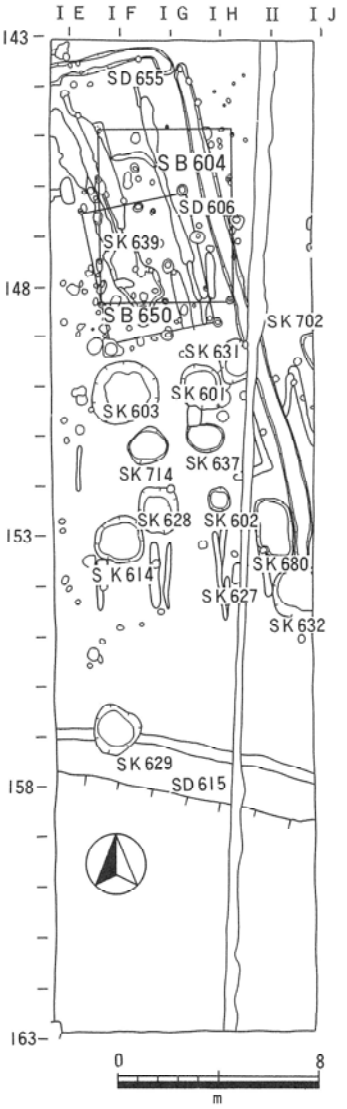
本建物跡柱穴のうち17ヶ所から土器片が出土している。内黒土師器坏（第13図３・５～７），赤焼土器坏（同図４）などがあり，時期的には平安時代10世紀後半頃に属するものである。

ＳＢ201建物跡（第６図）　ＳＢ14建物跡の南1.6ｍで検出された梁行１間，桁行４間の東西に長い掘立柱建物跡である。柱間距離は，梁行3.0ｍ（10尺），桁行2.7ｍ（９尺）等間で，桁行長は10.8ｍになる。南北方位はＮ―９°15′―Ｗで，ＳＢ14建物跡よりやや西に振れる。

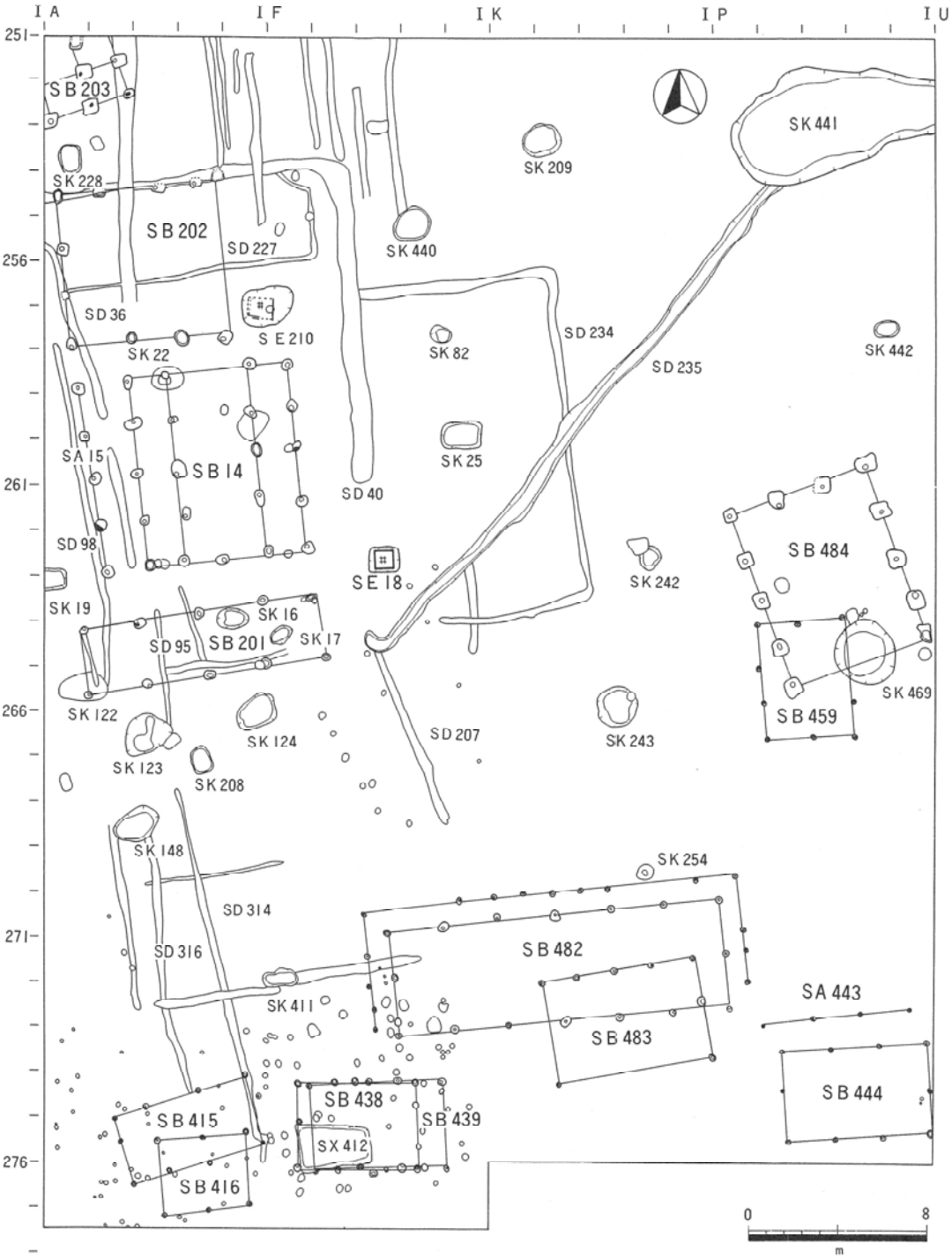
柱穴掘り方の大きさや埋土はＳＢ14建物跡と同様で，６ヶ所から土器片が出土している。須恵器・赤焼土器などがあり10世紀後半に属する。

ＳＡ15柱列（第６図）　ＳＢ14建物跡の西1.8ｍで検出された５本の柱列である。柱間距離は2.1ｍ（７尺）等間で，目隠塀的なものである。

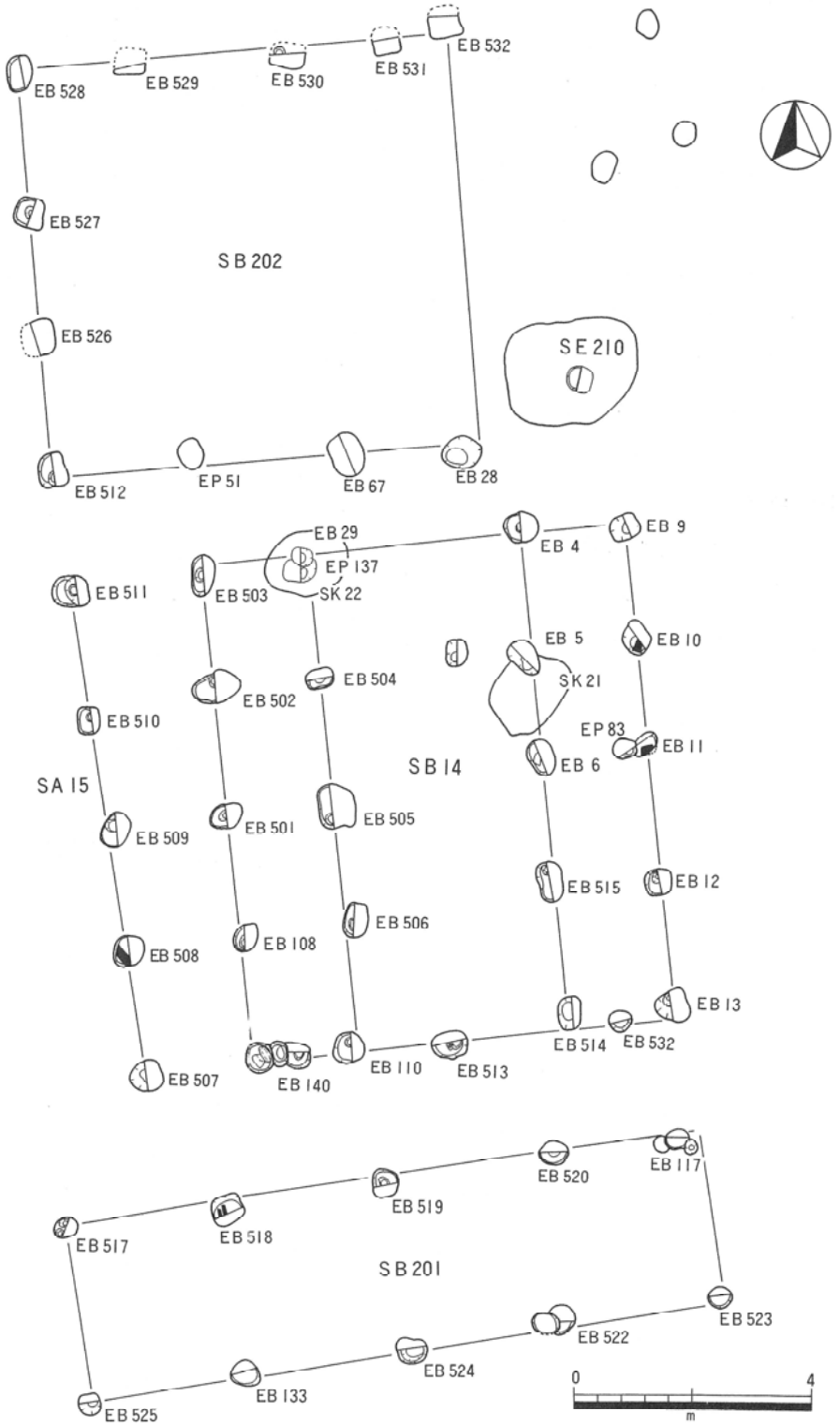
柱穴掘り方の大きさや埋土はＳＢ14と同様で，内黒土師器坏（第13図８）などが出土している。



第４図　２次調査遺構配置図



第 5 図　1 次調査遺構配置図



第6図　ＳＢ14・201・202建物跡・ＳＡ15柱列

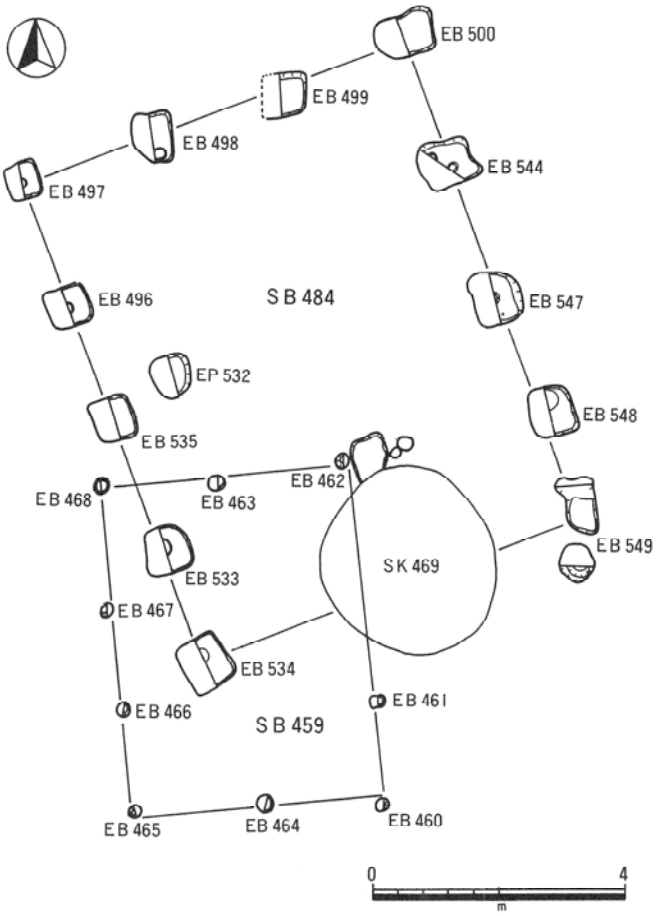
ＳＢ202建物跡（第６図）

ＳＢ14建物跡の北西隣で検出された３間四方の掘立柱建物跡で，東面梁行の柱穴が一部不明である。柱間距離は，西面梁行が南から2.4・2.1・2.4ｍ，南面桁行が2.4ｍ等間となる。南北の方位は，Ｎ－5°5′－Ｗを測る。

柱穴掘り方のうち４ヶ所から須恵器（第13図９），赤焼土器（同図10）が出土している。

ＳＢ203建物跡（第５図）

１次調査精査地区北西隅で検出された２間四方の倉庫跡と思われるもので，北西部の柱穴が一部未検出である。柱間距離は中央梁行が1.5ｍ等間，南面桁行が1.8ｍ等間となる。南北軸の方位はＮ－20°00′－Ｗを測る。



第７図　ＳＢ459・484建物跡

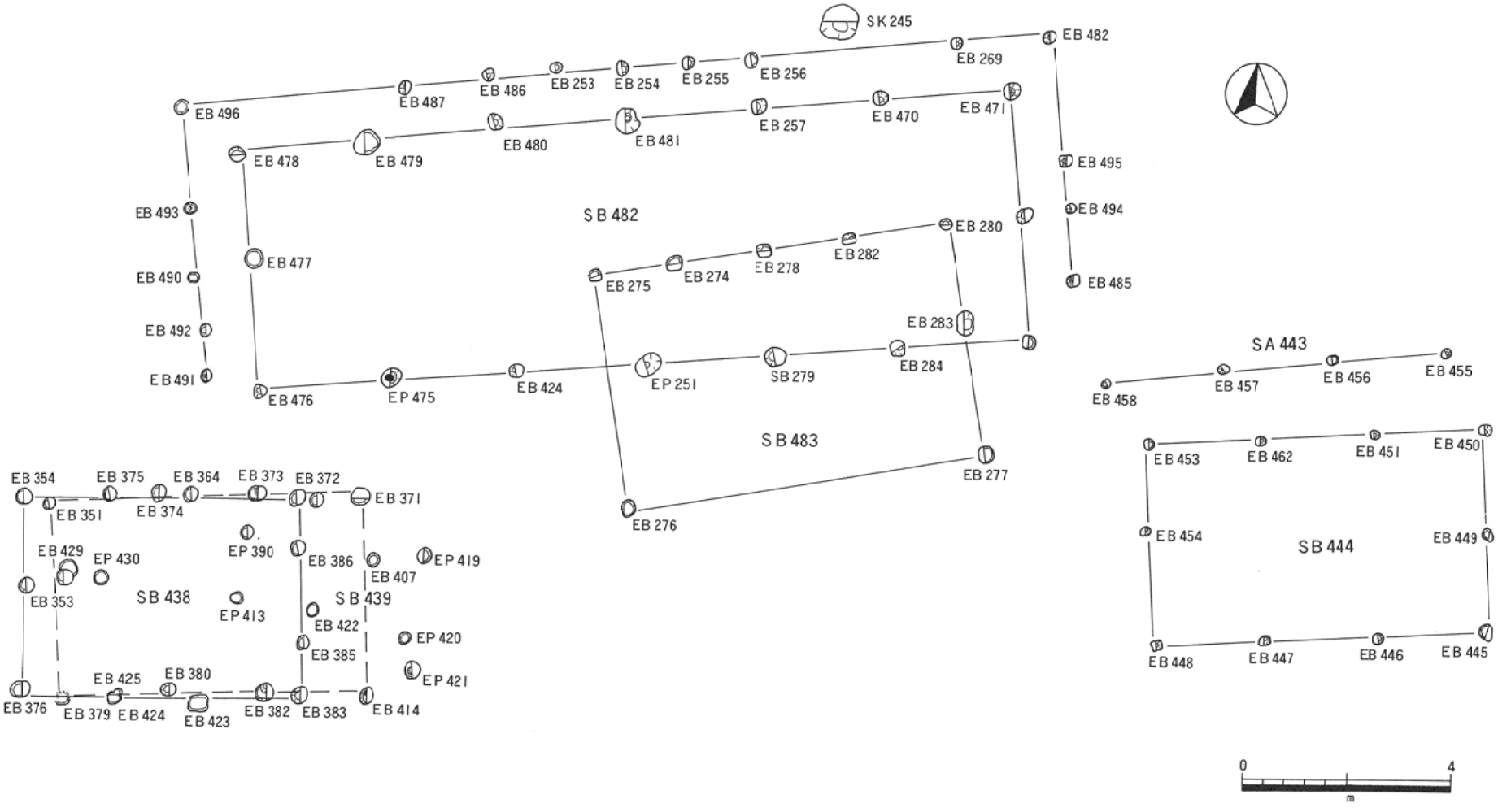
柱穴掘り方は隅丸方形を呈し，埋土は暗黄褐色粘質土である。３ヶ所に径18cmの角柱根が残っている。土器の出土はない。

ＳＢ484建物跡（第７図）　１次調査精査地区東側ＩＰ～ＩＴ－260～265Ｇで検出された梁行３間，桁行４間の南北に長い掘立柱建物跡である。南側がＳＫ469土壙によって切られている。柱間距離は梁・桁行ともに2.1ｍ等間である。南北軸方位はＮ－20°00′－Ｗを測る。

柱穴掘り方は隅丸方形を呈し，埋土は暗黄褐色粘質土である。柱穴のうち７ヶ所から須恵器（第13図11），赤焼土器（同図12），内黒土師器片が出土している。

ＳＢ459建物跡（第７図）　ＳＢ484建物跡の南西隅に重複して検出された梁行２間，桁行３間の南北に長い掘立柱建物跡である。柱間距離は，北面梁行が東から2.1・1.8ｍ，西面桁行が南から1.5・1.8・1.8ｍを示す。南北軸方位はＮ－5°00′－Ｗを測る。柱穴掘り方は約25cmと小さく，埋土は黒灰褐色粘質微砂である。２ヶ所から須恵器等が出土している。

ＳＢ482建物跡（第８図）　１次調査精査地区南東隅ＩＨ～ＩＰ－269～273Ｇで検出された梁行２間，桁行６間の東西に長い掘立柱建物跡である。北面と東西の三面に縁束が付く。



第8図　ＳＢ438・439・444・482・483建物跡・ＳＡ443柱列

身舎梁行長が4.8m，桁行長が15.0mあり，各柱間距離はほぼ2.4mを測る。三方を囲る束柱間の距離は0.9～2.1mと不規則である。南北軸方位はN－4°10′－Wを示す。柱穴掘り方は30cm前後の円形を呈し，埋土は黒褐色粘質土に第Ⅳ層が混る。遺物は認められない。

ＳＢ483建物跡（第８図）　ＳＢ482建物跡の南側に重複して検出された梁行２間，桁行４間の東西棟の掘立柱建物跡である。柱間距離は東面梁行で北から2.1・2.4m，北面桁行で東から2.1・1.6・1.6 ・1.6mを示す。南北軸方位はN－9°30′－Wである。

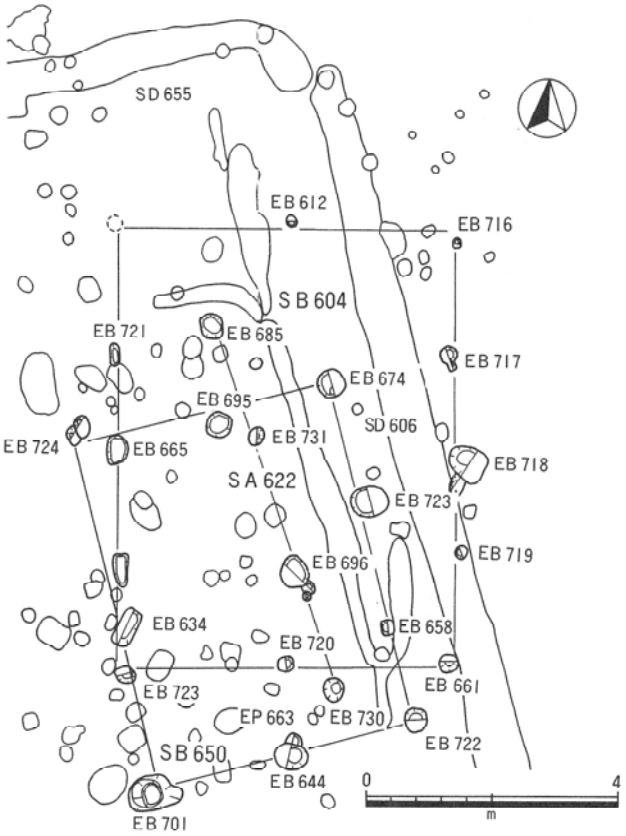
ＳＢ444建物跡・ＳＡ443柱列（第８図）　ＳＢ482建物跡の南東に検出された梁行２間，桁行３間の掘立柱建物跡と北側の目隠塀と思われるものである。柱間距離は桁行が2.1m等間，梁行が1.8～2.1mである。南北軸方位はＳＢ482建物跡と同じである。

ＳＢ438・439建物跡（第８図）　ＳＢ482建物跡の南西に検出された梁行２間，桁行３間の２棟の掘立柱建物跡である。柱穴間の切り合いは認められないが，掘り方埋土はＳＢ438建物跡が黒褐色粘質土，ＳＢ439建物跡が暗黄褐色微砂を主体とする。南北軸方位は前者がN－120′－W，後者がN－3°00′－Wを測る。梁行長は両建物とも3.9mであるが、桁行長は前者が1.8m，後者が2.1m等間の３間である。柱穴掘り方は直径25cm前後の円形を呈し，両建物合せて７ヶ所から須恵器・赤焼土器・内黒土師器片が出土している。

ＳＢ415・416建物跡（第５図）　１次調査精査地区南西隅で検出された重複する２棟の掘立柱建物である。ＳＢ415建物跡は梁行２間，桁行３間の東西棟で，南方軸方位はN－17°30′－W，ＳＢ416建物跡は２間四方で，方位はN－3°00′－Wを示す。

ＳＢ604建物跡（第９図）　２次調査精査地区北半ＩＥ～ＩＨ－144～148Ｇで検出された梁行２間，桁行４間の南北に長い掘立柱建物である。南北軸方位はN－1°20′－Wを示す。柱間距離は，梁行が2.7m等間，桁行が北から1.8・1.8・1.5・1.8mである。

ＳＢ650建物跡（第９図）　ＳＢ604建物跡の南西部に重複して検出された梁行２間，桁行３間の南北に長い建物跡である。南北軸方位はN－12°50′－Wを示す。柱間距離は，梁行が2.1m等間，桁行が1.5～2.1mである。



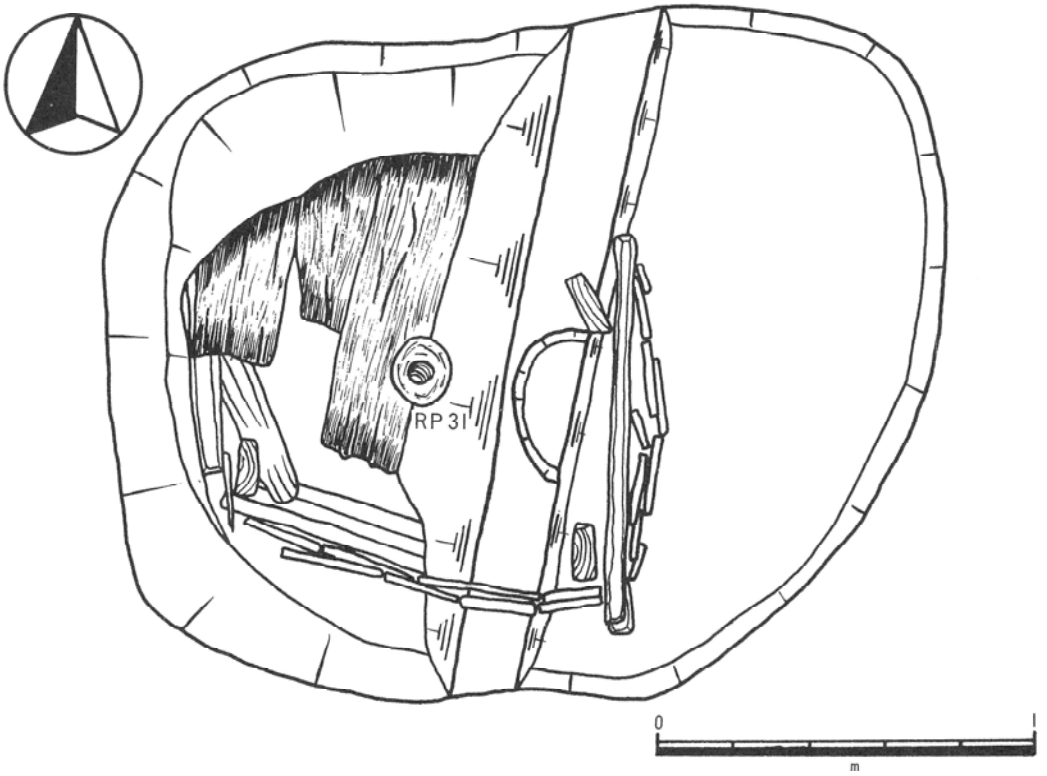
第９図　ＳＢ604・650建物跡・ＳＡ622柱列

（2）井戸跡（第10・11図，図版５・６）

ＳＥ210井戸跡（第10図，図版６）　１次調査精査地区の北西隅，ＳＢ203倉庫跡の南西11ｍ，ＩＥ・ＩＦ―256・257グリッド第Ⅳ層上面で確認された井戸跡である。整地層と思われる暗褐色粘質土（第Ⅲｂ層）に覆われているので，ＳＢ14建物跡よりは時期が古くなり、ＳＢ203倉庫跡とほぼ同じ時期の遺構と推定される。

掘り方は，東西220cm，南北180cmの不整楕円形を呈し，深さは50cm下までしか全体を掘り下げていないので不明である。井側は土圧で歪んでいるが，本来は約90cm四方の方形をなしていたものと考えられる。井戸枠組を構成する矢板が縦に２重に打ち込まれているもので，四隅に厚板を用いた隅柱があり，さらにその内側に横桟としての角材が方形に組まれている。また上面には隅柱の外側に横材を方形にわたし補強している。井戸掘り方の埋土は暗青灰色粘質土であるが、掘り方上面および井側内には整地層と思われる暗褐色粘質土が厚く堆積している。遺構検出当初この整地層を掘り込んでいる柱穴が１個みられた。

井戸跡の掘り方埋土および整地層から 140 片の土器が出土している。須恵器坏（第14図26～28），赤焼土器坏（29～32），同甕（33），内黒土師器坏などがあり，量的には赤焼土器が全体の66％を占める。遺物からみて井戸跡の廃絶時期は10世紀後半頃と推定される。



第10図　ＳＥ210井戸跡

ＳＥ18井戸跡（第11図，図版５）　１次調査精査地区の中央やや西寄り，ＳＢ14建物跡の南西3.5ｍ，ＩＨ―262グリッド第Ⅳ層直上で検出された井戸跡である。

掘り方は，東西133cm，南北118cmの隅丸方形を呈し、深さ150cm以上のほぼ垂直な掘り込みをもつ。井側は南側が土圧で歪んでいるが，本来は内径約90cm四方の方形をなしていたものと考えられる。井戸枠組を構成する矢板が縦に１～２重に打ち込れているもので，その内側に厚さ６cmの角材を横桟として底面と中段に２段方形に組んでいる。矢板は厚さ1.5cm，幅15cm，現存長100cm前後のものである。遺構検出面から井側底面までの深さが110cmを測り，底面には小砂利を敷いている。

井戸掘り方の埋土は炭化粒子を含む暗青灰色粘土の単一層で，井側内の埋土は第11図のように10層に分けられる。８・10層が炭化した籾の層で，人為的な堆積状況がうかがえる。

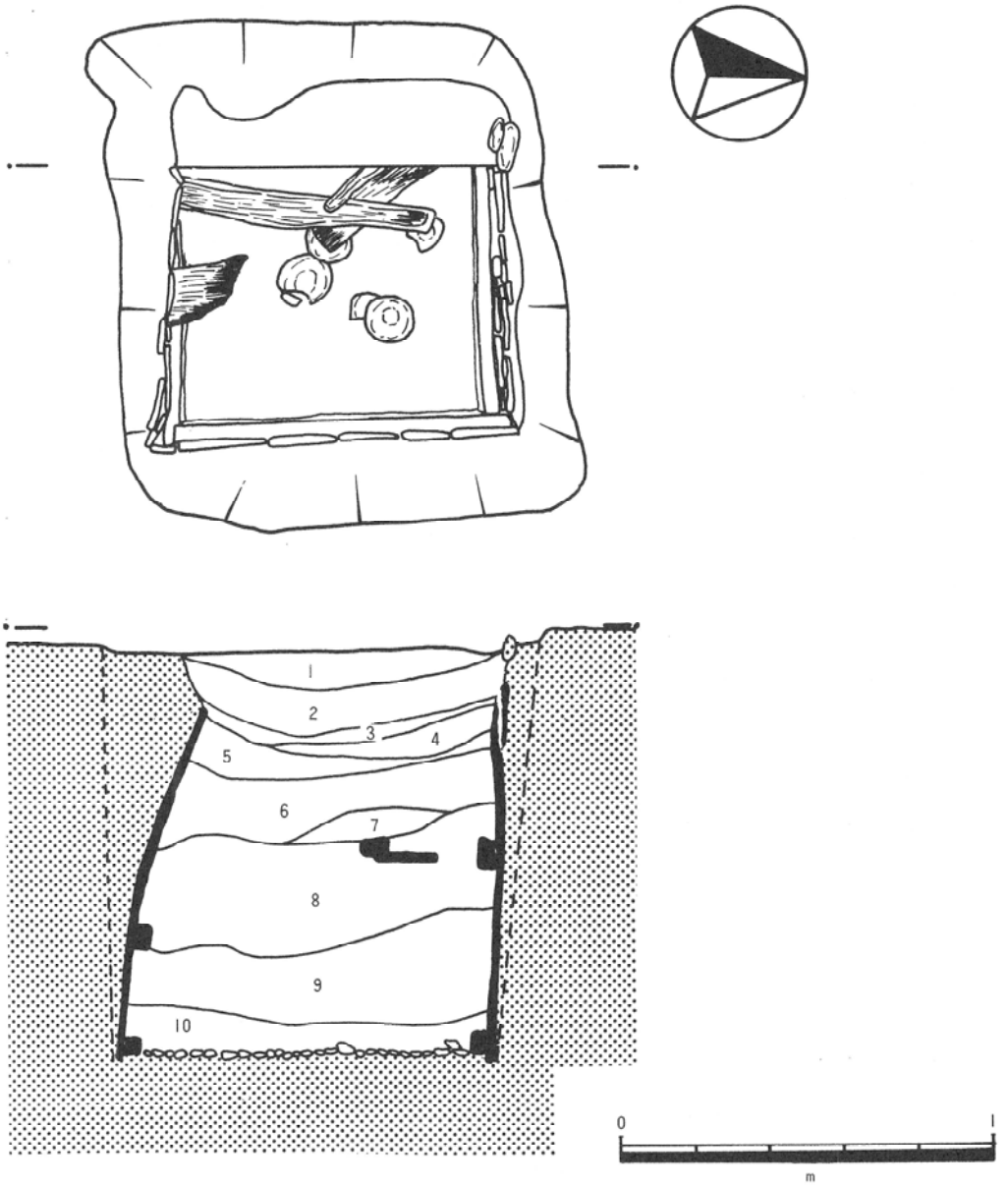
井側内の埋土から出土した遺物には，土器・木製品・布・自然遺物などがある。各層から遺物が出土するが，とくに１・６・９層に多い。土器は土師器・須恵器・赤焼土器の三種があり，合計231片出土している。各々の比率は10：７：83で赤焼土器が多くを占める。第13図は埋土６・９・10層出土の主な土器で，13が内黒土師器高台付坏，14～24が赤焼土器坏，25が同高台付坏である。赤焼土器坏は口径に比して底径と器高値が少なく，体部から口縁部にかけて外反する器形で，層位による違いは認められない。底部の切り離しはすべて回転糸切り手法によるものである。高台をもつ内黒の土師器坏や口縁部が丸く膨む赤焼土器甕の供伴も考慮すれば，これらの土器の時期は平安時代11世紀頃と推定される。
木製品や自然遺物などについては次節で触れる。

（３）土　壙（第12図，図版６～８）

前後２次の調査で検出された土壙は41基を数える。土壙の形態や埋土から幾つかのタイプに分類できるが，それらは時期差というよりは性格の違いを示しているようである。土壙は単独で検出される場合もあるが，多くは１次調査精査地区中央西寄りや，２次調査精査地区中央のように密集して発見される場合が多い。ここでは主たる土壙について述べる。

ＳＫ25土壙（第12図）　ＩＪ―260Ｇ，ＳＢ14建物跡の西方７ｍで検出された長径184cm，深さ15cmの隅丸長方形の土壙である。底面に幾分赤く焼けており，埋土下層に炭化物と灰を多く含む。上層から赤焼土器坏や須恵器坏が出土しており，時期は10世紀後半にあたる。

ＳＫ148土壙（第12図）　ＩＢ・Ｃ―268Ｇ，ＳＢ201建物跡の南方６ｍで検出された長径23cm，深さ23cmの不整楕円形の土壙である。埋土は３層に分かれ，1・2層から土器が112片出土している。底部切り離しがヘラ切り手法による須恵器坏（第16図55・56），「中」の墨書がある須恵器坏（57）などが出土しており，時期は10世紀中葉頃にあたる。



SE18井戸跡土層

1　黒褐色微砂（炭化物を多く含む）
2　黒褐色微砂（炭化物を少量含む）
3　灰黄褐色粘質微砂
4　暗灰褐色粘質微砂
5　黒褐色粘質微砂
6　灰褐色粘質微砂（土器を多く含む）
7　黒褐色粘質微砂
8　茶褐色粒層
9　暗青灰色粘質土（土器を多く含む）
10　茶褐色粒層（土器を多く含む）

第11図　ＳＥ18井戸跡

ＳＫ209土壙（第12図，図版７）　ＩＬ・Ｍ—253Ｇ，ＳＢ202建物跡の北西15ｍで検出された長径170cm，深さ15cmの楕円形の土壙である。埋土は５層に分かれ２・４層から土器が13片出土している。赤焼土器坏（第16図53・54，図版15）が主であるが，須恵器坏・甕の細片も少量混っている。時期は平安時代10世紀後半頃と推定される。

ＳＫ602土壙（第12図，図版８）　２次調査ＩＧ—152Ｇ，ＳＢ650建物跡の南方７ｍで検出された直径97cm，深さ26cmの隅丸方形の土壙である。埋土は黒褐色微砂の単一土層で，底面はやや丸味をもって立上る。土壙内から62個体の一括土器が並べられたような状態で発見されている。ほとんど供膳形態の坏ないし高台付坏で人為的に埋められたものである。

ＳＫ627土壙（第４図）　ＩＨ—153Ｇ，ＳＢ650建物跡の南方10ｍで検出された長径70cm，深さ10cmの長方形の土壙で，東側が暗渠によって壊されている。埋土は焼成炭化物と骨片の混合層である。火葬墓の一種かと思われるが，他に遺物もなく不明な点が多い。

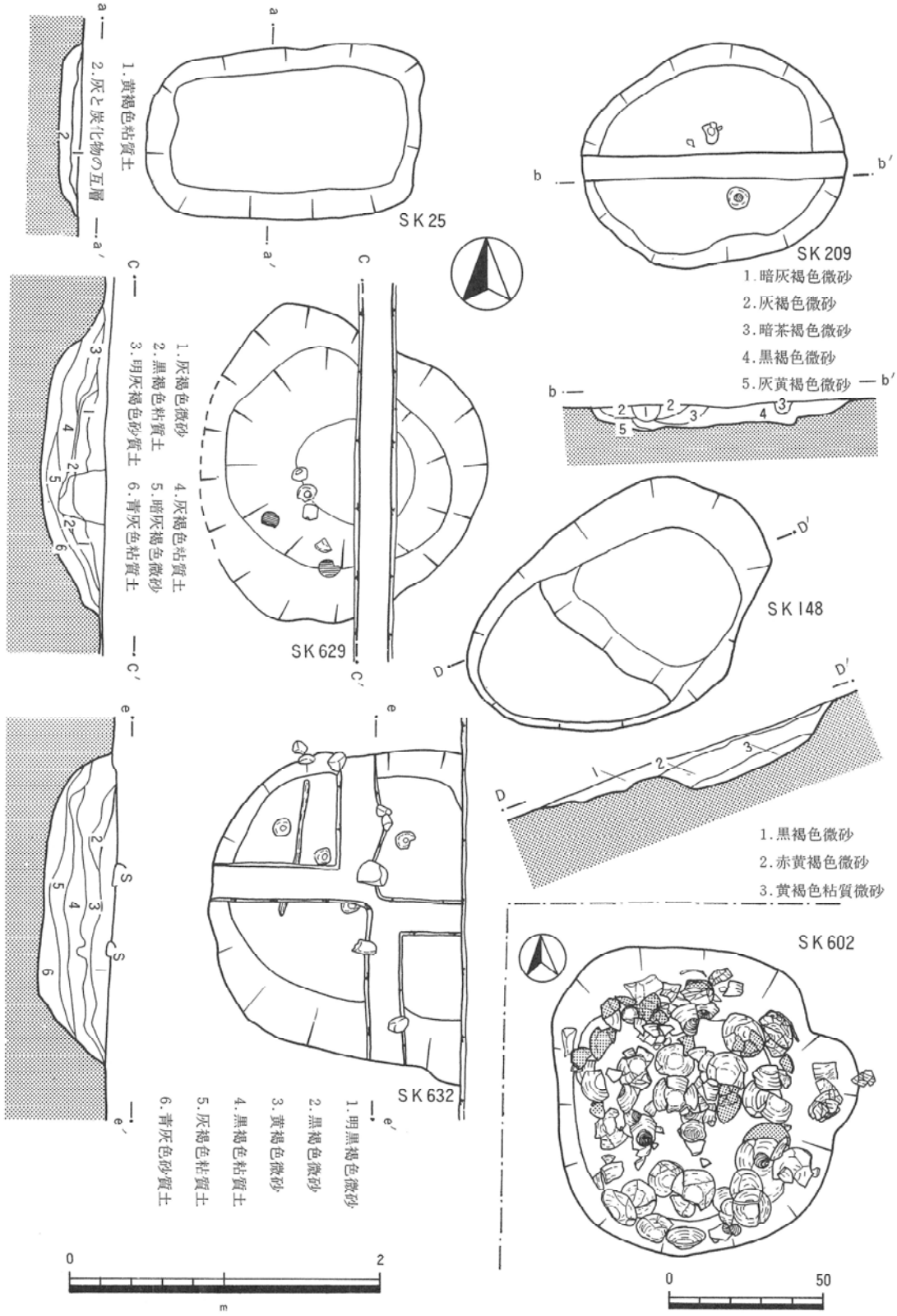
ＳＫ629土壙（第12図）　ＩＥ・Ｆ—15・157Ｇ，ＳＢ65 建物跡の南方15ｍで検出された径192cm，深さ46cmの略円形の土壙である。底面は丸味をもち壁がゆるやかに立上る。
中央が他の柱穴によって切られているが，埋土は６層に大別される。５層から土器がまとまって出土している。内黒土師器坏（第19図131），赤焼土器坏（132～135），須恵器坏・甕などがあり，時期は平安時代10世紀後半頃に比定できる。

ＳＫ632土壙（第12図，図版８）　ＩＩ—15・154Ｇ，ＳＢ650建物跡の南東12ｍで検出された長径196cm，深さ47cmの隅丸方形の土壙である。底面は平らで壁が丸味をもって立上る。東端が未調査であるが，埋土は６層に大別される。４・５層から土器がまとまって出土している。内外面に黒色化処理が施されている土師器壺（第19図136），同坏赤焼土器坏（ 37～143），須恵器甕などがあり，時期は平安時代11世紀頃に比定される。

（４）その他の遺構（第５図，図版３・７）

ＳＫ441土壙・ＳＤ235溝状遺構（第５図，図版７）　１次調査精査地区北東部で検出された検出長9.4ｍ，最大幅4.5ｍ，深さ40～72cmの不整楕円形の落ち込みと，そこから南西に26ｍ程延びる幅60cm，深さ30cm前後の溝状遺構である。ＳＤ235溝跡はSK441落ち込みに行く程深くなっており，ＳＥ18井戸跡からの水の取入用とも考えられる。ＳＫ441落ち込みの埋土は７層に分けられ，下層にゆく程グライ化が強い。池の可能性も考えられる。

ＳＡ204板列（図版３）　１次調査精査地区の南西20ｍ、50Ｐ～Ｒ—266～275Ｇで検出され長さ30ｍの板列である。幅40cm、深さ30cm前後の溝状の掘り方のほぼ中央に，幅18cm程の板材を１列に埋め込んでいるもので，約1.8ｍ毎に横方向の板材がある。板列の方向はＮ—12°—Ｗを指す。時期はＳＫ205土壙出土の遺物からみて10世紀後半頃と考えられる。



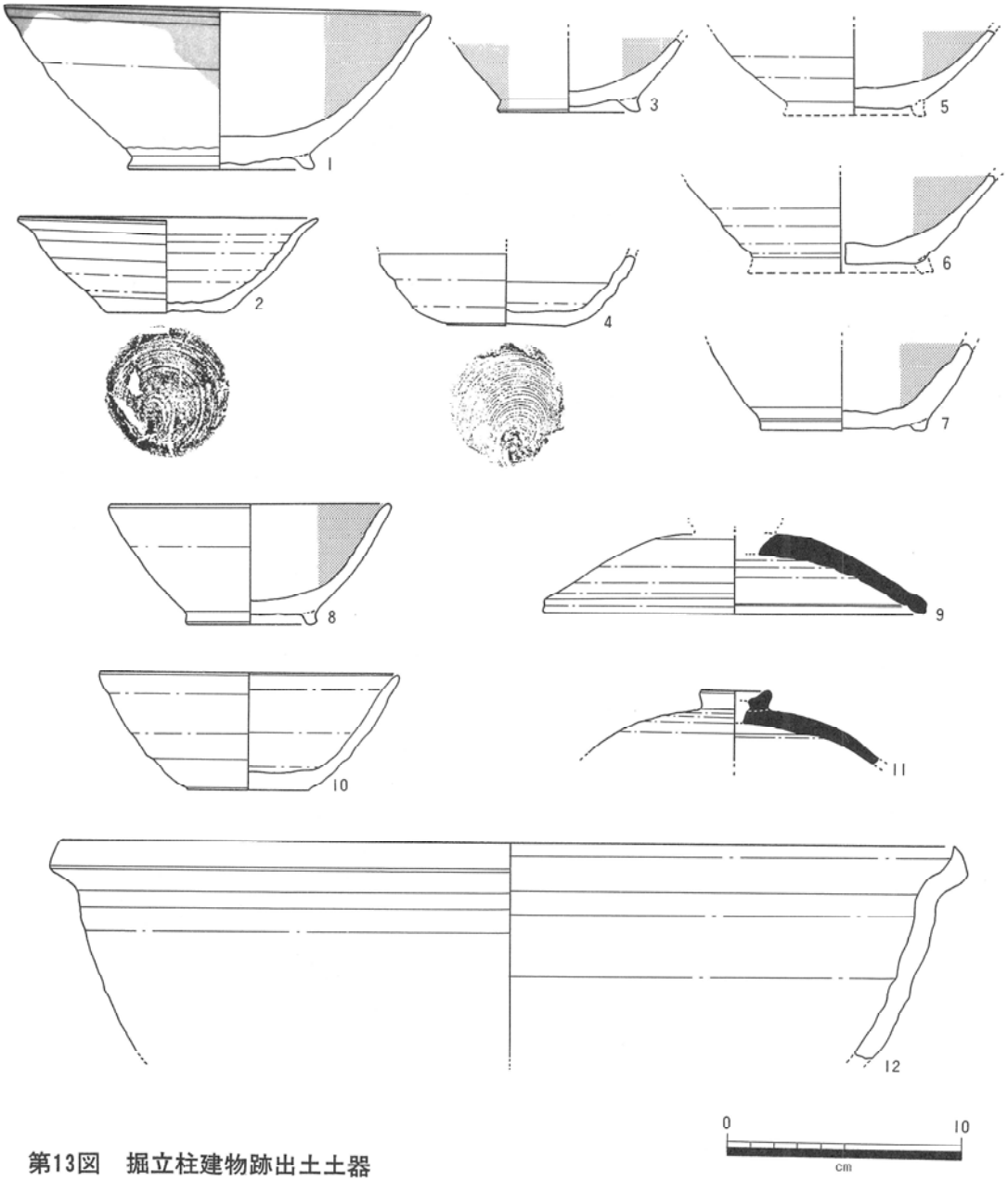
第12図　ＳＫ25・148・209・602・629・632土壙

3　遺　物

後田遺跡の２次にわたる発掘調査で出土した遺物は，整理箱にして約137箱分である。このうち土器が130箱と大半を占め，箸や曲物などの木製品，仏像などの金属製品も出ている。

（１）建物跡出土の土器（第13図，表１，図版９）

15棟のうちＳＢ203・483・482・444 建物跡を除く11棟の建物跡の柱穴埋土から少量ずつ土器が出土している。土師器・須恵器・赤焼土器の三種があり赤焼土器が量的に多い。



第13図　掘立柱建物跡出土土器

表1.　掘立柱建物跡出土土器　　※　回糸（回転糸切り）、ヘラ切（回転ヘラ切り）、黒色化（黒色化処理）以下各表同じ

遺物番号	器種		計測値（㎜） 口径	底径	器高	色調	胎土	焼成	底部切離	調整技法・備考	出土地点
1	土師器	高台坏	180	76	66～71	赤褐色	粗砂混	良	回糸	内面ミガキ→黒色化	ＥＰ663－Ｆ1（ＳＢ650）
2	赤焼土器	坏	(130)	52	39～40	灰赤色	砂粒混	良	回糸		ＥＰ663－Ｆ1（ＳＢ650）
3	土師器	高台坏		58		黒色	粗砂混	良		内面ミガキ→黒色化	ＥＢ110－Ｆ1（ＳＢ14）
4	赤焼土器	坏		50		灰褐色	緻密	良	回糸		ＥＢ501－Ｆ1（ＳＢ14）
5	土師器	高台坏		(48)		明褐色	粗砂混	良	回糸	内面ミガキ→黒色化	ＥＢ503－Ｆ1（ＳＢ14）
6				(62)		明褐色	粗砂混	良	回糸渦巻凹線	内面ミガキ→黒色化	ＥＢ503－Ｆ1（ＳＢ14）
7				72		赤褐色	砂粘混	良	回糸	内面ミガキ→黒色化	ＥＢ503－Ｆ1（ＳＢ14）
8			(120)	(55)	51	明褐色	粗砂混	良	回糸	内面ミガキ→黒色化	ＥＢ509－Ｆ1（ＳＡ15）
9	須恵器	蓋	(160)			灰色	緻密	良		つまみ部欠損	ＥＢ528－Ｆ1（ＳＢ202）
10	赤焼土器	坏	(128)	53	42	灰褐色	緻密	良	回糸	ヘラなで	ＥＢ532－Ｆ1（ＳＢ202）
11	須恵器	蓋	(30)			灰色	緻密	良		上面ケズリ	ＥＢ543－Ｆ1（ＳＢ484）
12	赤焼土器	堝	(367)			灰褐色	砂粒混	良			ＥＢ499　（ＳＢ484）

（２）井戸跡出土の遺物（第14・23図，表２，図版10・19）

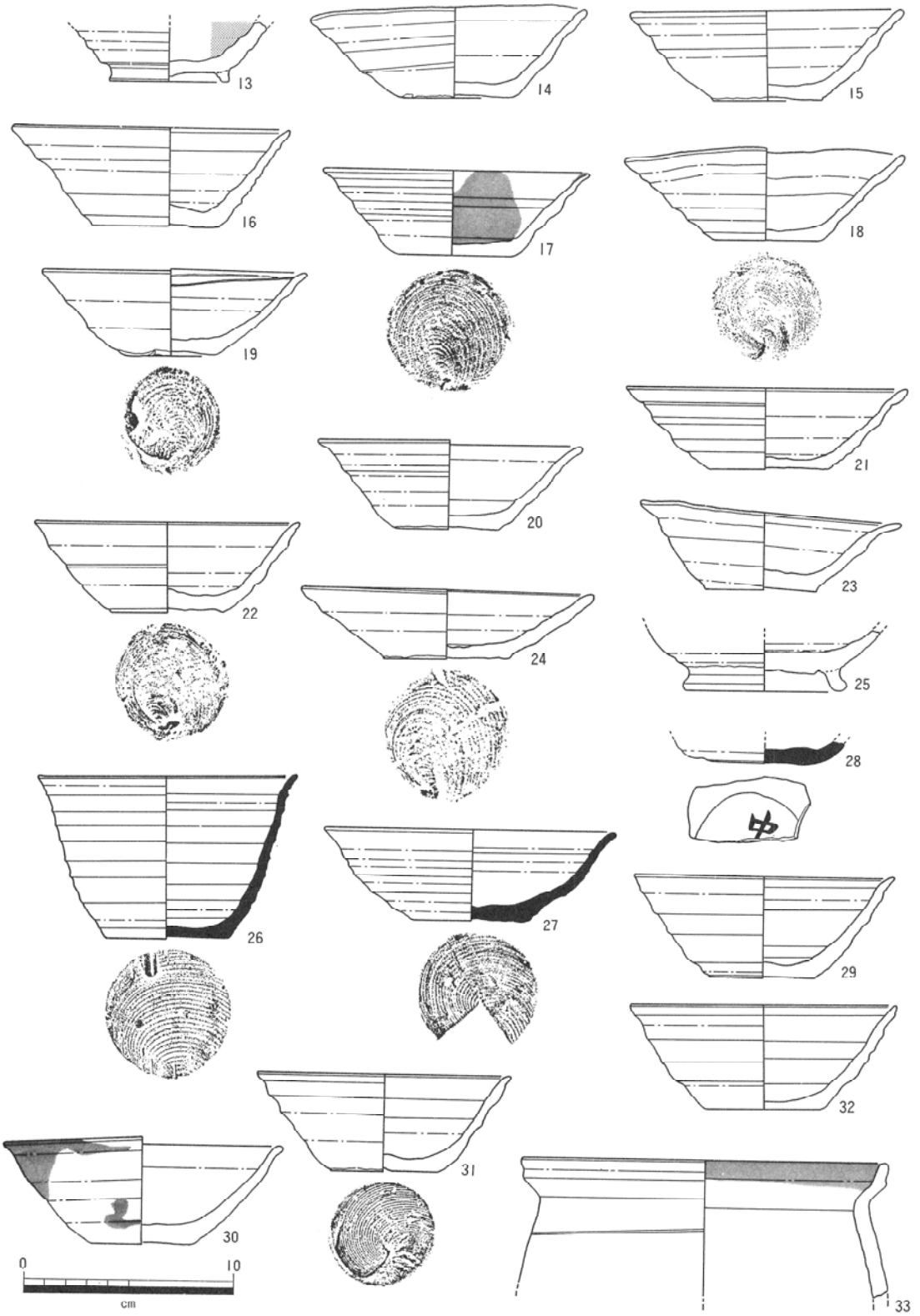
ＳＥ18・210井戸跡出土遺物のうち土器については述べてあるので，ここではＳＥ18井戸跡出土の木製品や自然遺物について述べる。

木製品は50点程出土している。ほとんどが井側埋土６・９・10層から検出されたものである。箸（第17図214～225），下駄（206），曲物底板（207・208），斎串（210・211），木椀（213），性格不明の木製品（209）などがある。木椀はロクロ挽きによる。斎串はＳＫ441土壙のものも含め３点出土しており注目される。このほか埋土９層から麻布断片が１点出土している（図版19―228）。大きさは幅12cm，長さ26cmを測る。

自然遺物としてクルミなどの堅果類（図版19―244），ヒョウタン仲間類・メロン仲間類に属する種子などがある。ＳＥ18井戸跡の埋土は整理箱に10箱程整理室に持ち帰ってきており，今後さらに自然遺物の種類や量が増加するものと思われる。

表２　ＳＥ18・210井戸跡出土土器

遺物番号	器種		計測値（㎜） 口径	底径	器高	色調	胎土	焼成	底部切離	調整技法・備考	出土地点
13	土師器	高台坏		56		茶褐色	緻密	良		内面黒色化，底部削り高台	ＳＥ18－Ｆ10
14	赤焼土器	坏	128～131	54～55	37～42	明褐色	粗砂混	良	回糸		ＳＥ18－Ｆ６
15			(127)	52	42	明褐色	粗砂混	良	回糸		ＳＥ18－Ｆ６
16			132	61	41	赤褐色	緻密	良	回糸		ＳＥ18－Ｆ10
17			124	56	38～39	灰赤褐色	砂粒混	良	回糸	内外にタール状物付着	ＳＥ18－Ｆ６
18			121～131	52～55	38～44	明褐色	少礫混	良	回糸		ＳＥ18－Ｆ９
19			125	46～50	40～42	暗灰色	粗砂混	良	回糸		ＳＥ18－Ｆ９
20			123～125	48～51	40～42	明褐色	粗砂混	良	回糸		ＳＥ18－Ｆ６
21			(132)	56	38	灰褐色	緻密	良	回糸		ＳＥ18－Ｆ６
22			(125)	53	35	灰褐色	緻密	良	回糸		ＳＥ18－Ｆ３
23			(174)	53	37	灰褐色	緻密	良	回糸		ＳＥ18－Ｆ６
24			135～139	60～61	30～35	灰褐色	砂粒混	良	回糸		ＳＥ18－Ｆ９
25		高台坏		74～75		灰褐色	砂粒混	良	回糸		ＳＥ18－Ｆ９
26	須恵器	坏	(124)	59	68	黒青色	緻密	良	回糸		ＳＥ210－Ｆ１
27			(135)	53	44	灰色	緻密	良	回糸		ＳＥ210－Ｆ２
28				50.2		灰褐色	緻密	良	ヘラ切	底部墨書「中」	ＳＥ210－堀り方
29	赤焼土器		123	50	49	赤褐色	砂粒混	良	回糸		ＳＥ210－Ｆ１
30			126	50	48～51	赤褐色	粗砂混	良	回糸	内外に煤付着	ＳＥ210－Ｆ２
31			122	50	46	赤褐色	緻密	良	回糸		ＳＥ210－Ｆ１
32			(126)	56	49	灰褐色	緻密	良	回糸		ＳＥ210－Ｆ１
33		甕	(170)			明褐色	粗砂混	良		口縁部内面に煤付着	ＳＥ210－Ｆ２



第14図　ＳＥ18・210井戸跡出土土器

（3）土壙出土の遺物（第15～19図，表3～7，図版11～15）

1次調査で検出された26基の土壙のうち22基から土器等の遺物が出土している。ここでは前節で触れ得なかった土壙について少し記述する。

ＳＫ19土壙からは，104片の土器が出土している。内黒の土師器高台付坏（第16図51），赤焼土器坏（52），須恵器細片などがあり，時期は平安時代10世紀後半頃に比定できる。

ＳＫ205土壙からは，90片の土器が出土している。須恵器壺（第16図59），回転糸切り離しによる須恵器坏（60），赤焼土器坏（62・63）等があり，時期は10世紀後半にあたる。

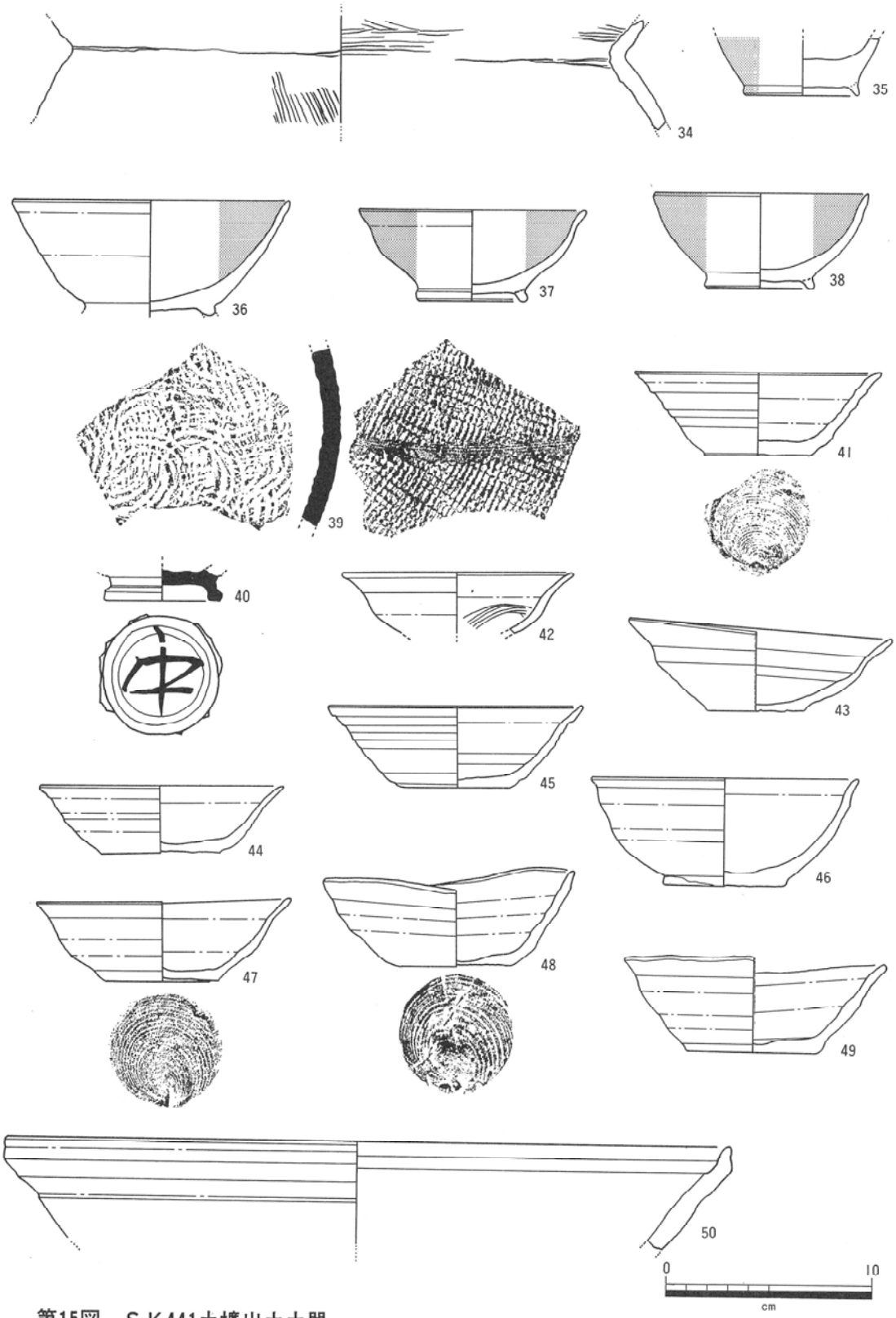
ＳＫ441土壙（落ち込み遺構）からは，555片の土器が出土している（第15図，図版11）。土師器甕（34），内面ないし内外面に黒色化処理が施されている高台付坏（35～38），須恵器甕（39），赤焼土器坏（41～49），同堝(50)等があり，時期は10世紀後半から11世紀までの幅をもつ。このほか木製品として斎串（第23図212）が1点出土している。

表3　ＳＫ441 土壙出土土器

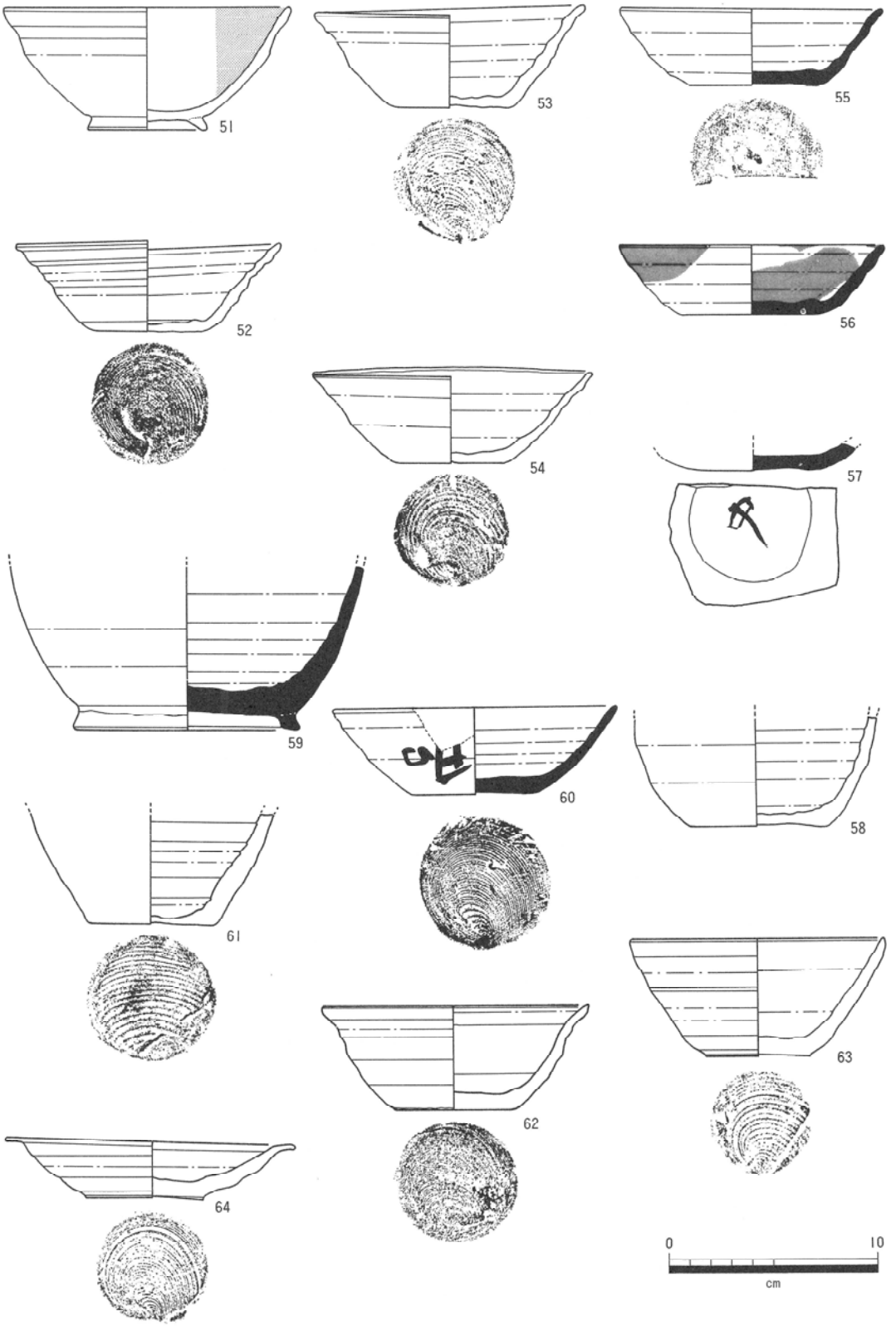
遺物番号	器種		計測値（㎜） 口径	底径	器高	色調	胎土	焼成	底部切離	調整技法・備考	出土地点
34	土師器	甕	(260)			灰褐色	粗砂混	良		内面横位のハケ目，外面右さがりのハケ目	ＳＫ441－Ｆ1
35	土師器	高台坏		55	(28)	黒色	粗砂混	良	切離後ミガキ	外面ミガキ→黒色化	ＳＫ441－中層
36	土師器	高台坏	(133)	64	(56)	明褐色	粗砂混	良	回糸	内面ミガキ→黒色化	ＳＫ441－中層
37	土師器	高台坏	(108)	52		黒色	粗砂混	良	回糸	内・外ミガキ→黒色化，外横ミガキ，内縦，横ミガキ	ＳＫ441－Ｆ1
38	土師器	高台坏	(104)	52	(46)	黒色	粗砂混	良	回糸	内・外ミガキ→黒色化 外横ミガキ	ＳＫ441－Ｆ1
39	須恵器	甕				灰色	緻密	良		格子目状タタキ，青海波文アテ	ＳＫ441－Ｆ1
40	須恵器	高台坏		52		赤褐色	緻密	良		底部墨書「中」	ＳＫ441－Ｆ5
41	赤焼土器	坏	(139)	53	40	灰褐色	砂粒混	良	回糸		ＳＫ441－Ｆ1
42	赤焼土器	坏	(112)			茶褐色	砂粒混	良			ＳＫ441－Ｆ1
43	赤焼土器	坏	127	59	35～44	明褐色	粗砂混	良	回糸		ＳＫ441－中層
44	赤焼土器	坏	(118)	58	32～34	赤褐色	粗砂混	良	回糸		ＳＫ441－中層
45	赤焼土器	坏	125	52	39		砂粒混	良	回糸		ＳＫ441－中層
46	赤焼土器	坏	(130)	58～59	52	赤褐色	砂粒混	良	回糸	底部煤付着	ＳＫ441－中層
47	赤焼土器	坏	125～128	55	39.5～40	赤褐色	砂粒混	良	回糸		ＳＫ441－中層
48	赤焼土器	坏	122～133	55～58	37～47	茶褐色	砂粒混	良	回糸		ＳＫ441－Ｆ
49	赤焼土器	坏	127～130	62～64	37～46	茶褐色	砂粒混	良	回糸		ＳＫ441－Ｆ
50	赤焼土器	堝	(300)		(50)	明褐色	粗砂混			内外面煤付着	ＳＫ441－Ｆ1

表4　土壙出土土器

遺物番号	器種		計測値（㎜） 口径	底径	器高	色調	胎土	焼成	底部切離	調整技法・備考	出土地点
51	土師器	高台坏	(138)	(53)	58	明褐色	砂粒混	良	回糸	内面ミガキ，黒色化	ＳＫ19－Ｆ1
52	赤焼土器	坏	125～130	52～55	39～44	灰褐色	砂粒混	良	回糸		ＳＫ19－Ｆ1
53	赤焼土器	坏	(130)	54～58	43～49	赤褐色	砂粒混	良	回糸		ＳＫ209－Ｆ2
54	赤焼土器	坏	133～134	52～54	41～45	赤褐色	砂粒混	良	回糸		ＳＫ209－Ｆ2
55	須恵器	坏	126	63	36～37	赤褐色	砂粒混	良	ヘラ切		ＳＫ148－Ｆ2
56	須恵器	坏	(126)	(64)	33	黒褐色	緻密	良	ヘラ切	内外面タール付着	ＳＫ148－Ｆ1
57	須恵器	坏		58		茶褐色	緻密	良	回糸	底部墨書「中」	ＳＫ148－Ｆ1
58	赤焼土器	甕		65		赤褐色	砂粒混	良	回糸	体部スス付着	ＳＫ148－Ｆ1
59	須恵器	壺		104		灰色	緻密	良		外面ナデ，内面ロクロナデ	ＳＫ205－Ｆ1
60	須恵器	坏	133	61～63	41～42	灰色	緻密	良	回糸	外面墨書	ＳＫ205－Ｆ1
61	赤焼土器	甕		61		茶褐色	緻密	良	回糸？	外面縦位のナデ	ＳＫ205－Ｆ1
62	赤焼土器	坏	(128)	58	49	赤褐色	緻密	良	回糸		ＳＫ205－Ｆ1
63	赤焼土器	坏	(132)	50	56	灰褐色	緻密	良	回糸		ＳＫ205－Ｆ1
64	赤焼土器	皿	(137)	56	36	赤褐色	砂粒混	良	回糸		ＳＫ205－Ｆ1



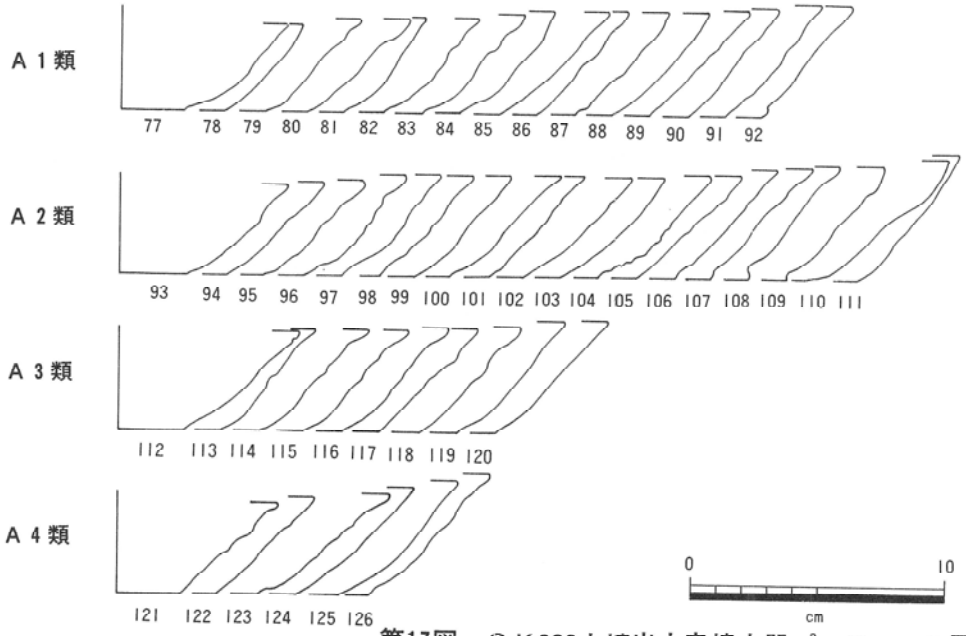
第15図　ＳＫ441土壙出土土器



第16図　土壙出土土器

ＳＫ602土壙出土の土器（第17・18図，表５，図版13・14）　本土壙からは62個体の一括土器および177の土器細片が出土している。土器片の多くは一括土器に伴うものと思われるが，須恵器13片と赤焼土器甕３片だけは接着するものがなく，性格を別に考える必要がある。

62個体の土器の内訳は，黒色化処理を施した土師器高台付坏（第18図67・70・72・74）10点，赤焼土器坏（77～126）50点，同高台付坏（127）１点，同高台付皿（128）１点となる。量の多い赤焼土器坏を口径によって４分し，その外形をみたものが第17図である。各類の口径の計測値は，おおよそＡＩ類（120～128㎜），Ａ２類（129～133㎜），Ａ３類（134～139㎜），Ａ４類（140～146㎜）となる。底部の切り離しはすべて回転糸切り技法によるもので，内外面ともヘラミガキやヘラケズリ等の再調整は認められない。各個体における外形の若干の差異はロクロ水挽き段階で生じたものと思われ，大きさによる企画の違いはうかがえても，基本的には同一の製作手法と考える方が妥当である。本土壙出土の土器群の時期は，全体として平安時代後半11世紀代頃に想定される。



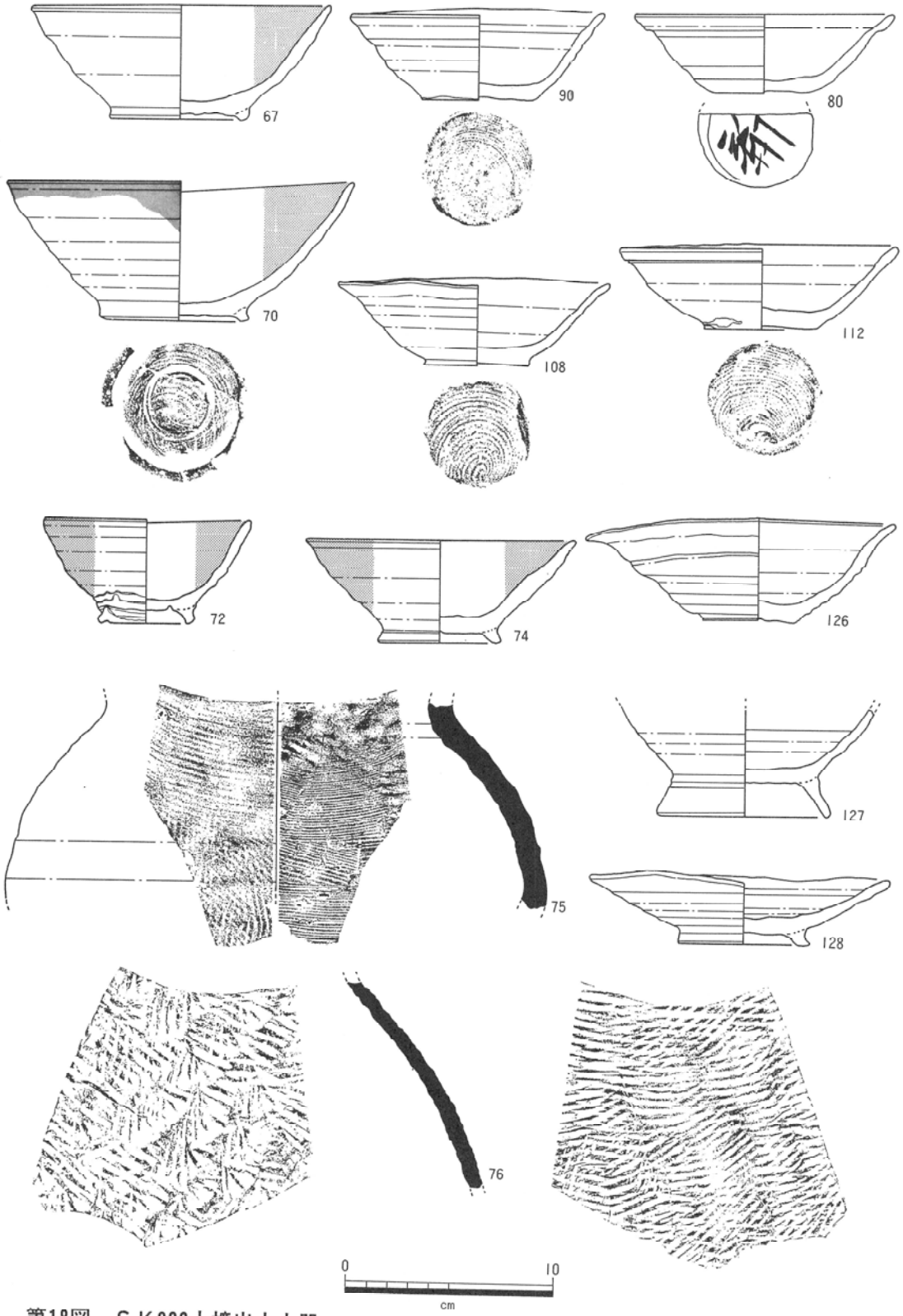
第17図　ＳＫ602土壙出土赤焼土器プロフィール図

表５　ＳＫ602土壙出土土器

※土器の分類基準は、土師器・赤焼土器・須恵器の器形毎にＡ～Ｃ類に分け、さらに口径によって１～４類に細分した。

器種				遺物番号	計測値（%） 口径	底径	器高	色調	胎土	焼成	底部切離	調整技法・備考
土師器	高台付坏	内面黒色化処理	Ａ１	65	138	65～67	49～54	赤灰色	細砂混	良	回糸	内面ミガキ→黒色化
				66	138	64	56	灰褐色	細砂混	良	回糸	〃
			Ａ２	67	144	66	55	灰褐色	粗砂混	良	回糸	〃
				68	144	52	59	赤灰色	粗砂混	良	回糸	〃
				69	148	67	43～52	灰褐色	細砂混	良	回糸	〃
			Ａ３	70	164～167	50	62～68	灰褐色	細砂混	良	回糸	〃
				71	170	66	67	赤灰色	細砂混	良	回糸	〃
		内外面黒色化処理	Ｂ１	72	100	24	50	黒色	細砂混	良	回糸	内外面ミガキ→黒色化
			Ｂ２	73	128	54	49	黒色	細砂混	良	回糸	〃
				74	128	59	59	黒色	細砂混	良	回糸	〃

器種			遺物番号	計測値(㎜) 口径	底径	器高	色調	胎土	焼成	底部切離	調整技法・備考
須恵器	甕	A	75				灰色	緻密	良		外面条線状叩目，内面ハケ目
			76				灰色	粗砂混	良		外面条線状叩目，内面菊花・条線状アテ
赤焼土器	坏	A1	77	(124)	54	34	灰褐色	粗砂混	良	回糸	
			78	110～120	55	36	赤褐色	細砂混	良	回糸	
			79	122～124	56	36～38	赤褐色	粗砂混	良	回糸	
			80	(126)	55	36	明褐色	粗砂混	良	回糸	底部墨書「新」
			81	123	60	37	灰褐色	細砂混	良	回糸	
			82	(120)	45	35～38	赤褐色	緻密	良	回糸	
			83	(122)	51～53	40	灰褐色	粗砂混	良	回糸	
			84	122～124	54	35	灰褐色	粗砂混	良	回糸	
			85	(127)	45	40～45	灰褐色	粗砂混	良	回糸	
			86	(122)	55	40	赤褐色	粗砂混	良	回糸	
			87	125～128	50	37～43	灰褐色	細砂混	良	回糸	
			88	124	50	42	赤褐色	粗砂混	良	回糸	
			89	120～122	51～54	41～43	赤褐色	粗砂混	良	回糸	
			90	118～121	55～58	39～42	明褐色	粗砂混	良	回糸	
			91	(122)	50	40～45	赤褐色	細砂混	良	回糸	
			92	122～124	55～59	42～45	灰褐色	細砂混	良	回糸	
		A2	93	130	55	30～42	灰褐色	粗砂混	良	回糸	
			94	(130)	53	47	赤褐色	粗砂混	良	回糸	
			95	130	55	37～40	赤褐色	粗砂混	良	回糸	
			96	127	50	38～41	赤褐色	粗砂混	良	回糸	
			97	(130)	50～55	40	灰褐色	粗砂混	良	回糸	
			98	130	55	38～42	灰褐色	粗砂混	良	回糸	
			99	(132)	(56)	40	灰褐色	細砂混	良	回糸	
			100	(130)	45	40	灰褐色	粗砂混	良	回糸	
			101	130	55	40	赤褐色	粗砂混	良	回糸	
			102	126～130	53～57	40～45	灰褐色	粗砂混	良	回糸	
			103	130	55	42	灰褐色	粗砂混	良	回糸	
			104	130	55	40	赤褐色	粗砂混	良	回糸	
			105	124～129	50	41～43	赤褐色	細砂混	良	回糸	
			106	130	50～53	40～45	灰褐色	細砂混	良	回糸	
			107	131	50	43～46	赤褐色	粗砂混	良	回糸	
			108	130	50	35～45	赤褐色	粗砂混	良	回糸	
			109	125～130	50	38～43	灰褐色	粗砂混	良	回糸	
			110	130	55	35	赤褐色	粗砂混	良	回糸	
			111	120～132	55	50	赤褐色	細砂混	良	回糸	
		A3	112	135	55	40	赤褐色	粗砂混	良	回糸	
			113	(135)	(60)	37～40	灰褐色	粗砂混	良	回糸	
			114	(134)	(50)	40	赤褐色	粗砂混	良	回糸	
			115	(136)	53	40～41	灰褐色	粗砂混	良	回糸	
			116	135	50～55	40～43	灰褐色	粗砂混	良	回糸	
			117	135	55	40～45	赤褐色	粗砂混	良	回糸	
			118	(134)	55	40～45	赤褐色	細粗混	良	回糸	
			119	(136)	54	44	灰褐色	細砂混	良	回糸	
			120	134	55	45	灰褐色	粗砂混	良	回糸	内面煤付着
		A4	121	146	50	33～36	赤褐色	細砂混	良	回糸	
			122	(140)	(60)	38	赤褐色	緻密	良	回糸	内面煤付着
			123	141	50	40～46	赤褐色	粗砂混	良	回糸	
			124	145	60～65	47	灰褐色	細砂混	良	回糸	
			125	(148)	(52)	45	灰赤色	粗砂混	良	回糸	
			126	139～144	45～47	43～48	赤褐色	粗砂混	良	回糸	
	高台坏	B	127			60	灰赤色	粗砂混	良	回糸	付高台
	皿	C	128	143	60	30～34	灰赤色	粗砂混	良	回糸	付高台



第18図　ＳＫ602土壙出土土器

2次調査検出土壙の土器（第19図，表6，図版5）　2次調査で検出された土壙15基のうち12基から土器が出土している。各土壙とも土器の出土量が多く，赤焼土器坏を主体としながらもすべて内黒土師器と須恵器を供伴しているのが特徴である。土器の製作技法等からほとんど同一時期（平安時代10世紀後半から11世紀頃）に比定できる。

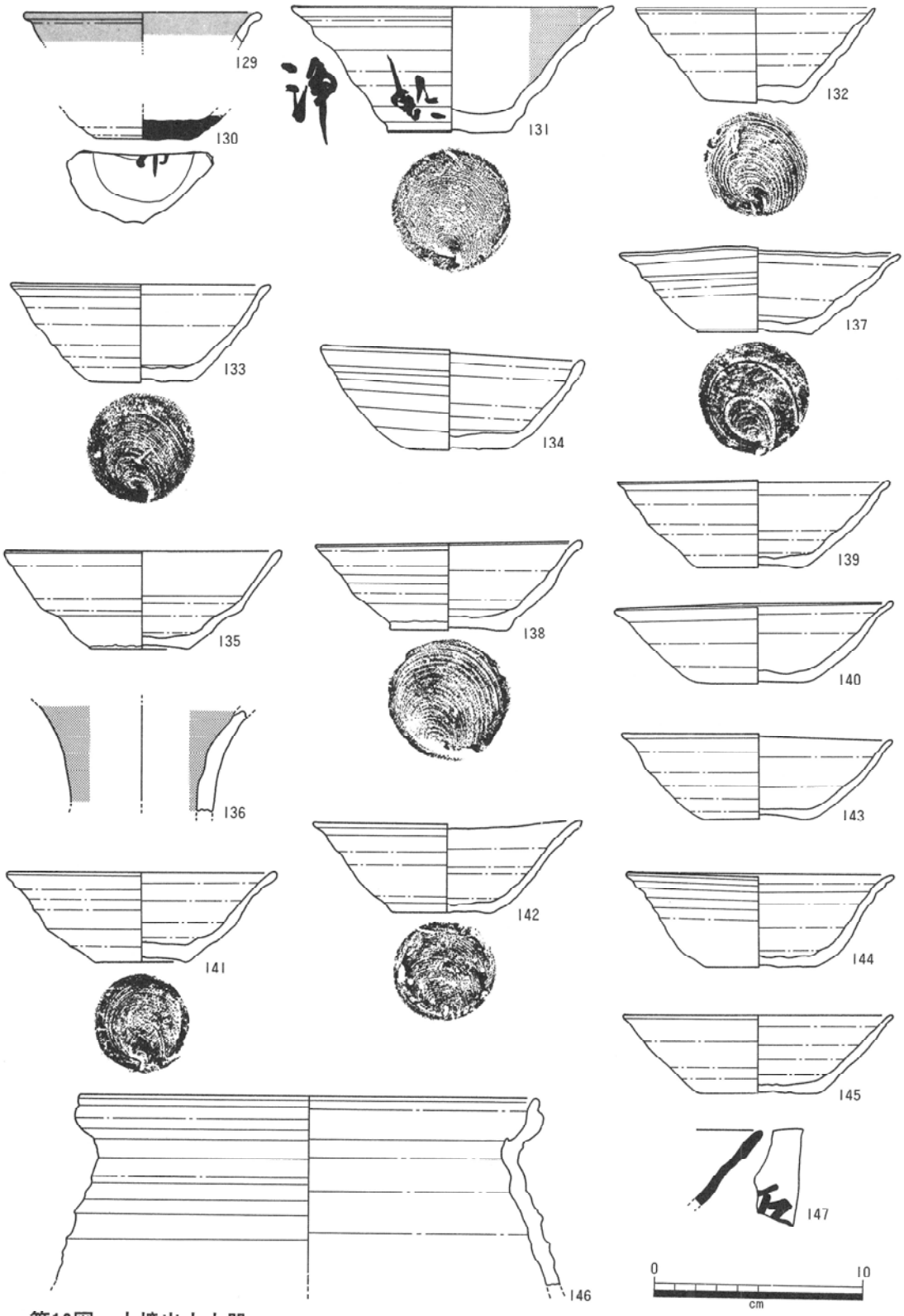
表6　土壙出土土器

遺物番号	器種		計測値（㎜） 口径	底径	器高	色調	胎土	焼成	底部切離	調整技法・備考	出土地点
129	灰釉陶器	塊	(110)			淡灰色	緻密	良		内外に施釉	SK601－F1
130	須恵器	坏		(47)		灰色	緻密	良	回糸	底部墨書	SK603－F4
131	土師器	坏	(154)	58	60	灰褐色	緻密	良	回糸	内面ミガキ,黒色化 墨書「浄」	SK629－F5
132	赤焼土器	坏	(125)	48	45	赤褐色	緻密	良	回糸		SK629－F5
133	赤焼土器	坏	(125)	53	46	赤褐色	砂粒混	良	回糸	外面に薄煤付着	SK629－F5
134	赤焼土器	坏	(123)	51	49.5	赤褐色	砂粒混	良	回糸		SK629－F5
135	赤焼土器	坏	(134)	57	47～50	赤褐色	砂粒混	良	回糸		SK629－F5
136	土師器	壺				黒色	緻密	良		内外面ミガキ，黒色化	SK632－F5
137	赤焼土器	坏	125～134	56	38～42	赤褐色	緻密	良	回糸		SK632－F5
138	赤焼土器	坏	127～129	58～60	40～45	白赤褐色	砂粒混	良	回糸		SK632－F4
139	赤焼土器	坏	130	48～52	39～42	明赤褐色	砂粒混	良	回糸		SK632－F5
140	赤焼土器	坏	133	54	38	赤褐色	緻密・砂粒混	良	回糸		SK632－F5
141	赤焼土器	坏	127～132	45	40～43	赤褐色	砂粒混	良	回糸		SK632－F5
142	赤焼土器	坏	128～134	48～50	41～45	赤褐色	砂粒混	良	回糸		SK632－F4
143	赤焼土器	坏	125～131	54	38～42	赤褐色	砂粒混	良	回糸		SK632－F5
144	赤焼土器	坏	(130)	53	43～44	赤褐色	砂粒混	良	回糸		SK680
145	赤焼土器	坏	(130)	(56)	37	灰赤色	砂粒混	良	回糸		SK680
146		甕	(210)			赤褐色	砂粒混	良		外面煤付着	SK680
147	須恵器	坏				灰色	緻密	良		外面墨書	SK680

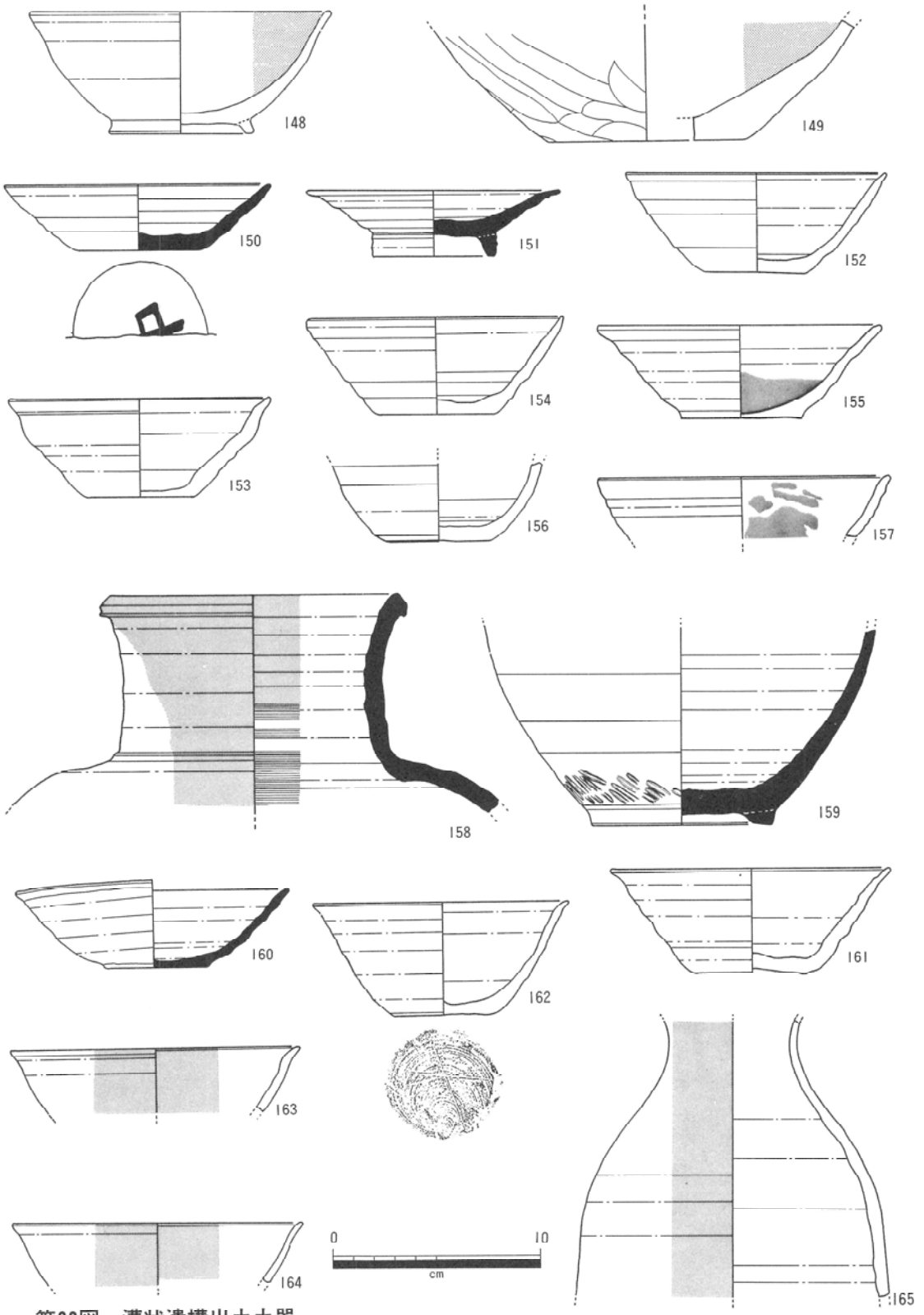
（4）溝状遺構出土の土器（第20図，表7，図版16）　内面に漆が付着している赤焼土器（第20図155・157），緑釉陶器（163・164），手付水瓶と思われる灰釉陶器（165）などが注目される。溝状遺構出土の土器は，全体的に時期的な幅が大きい。

表7　溝状遺構出土土器

遺物番号	器種		計測値（㎜） 口径	底径	器高	色調	胎土	焼成	底部切離	調整技法・備考	出土地点
148	土師器	高台坏	(144)	67	58	明褐色	粗砂混	良	回糸	内面ミガキ，黒色化	SD37－F1
149	土師器	甕		96	(56)	明褐色	粗砂混	良	砂底	内面縦・横ミガキ,黒色化,外面けずり	SD40
150	須恵器	坏	(128)	58	32	赤褐色	緻密	良	回糸	底部墨書「中」	SD207－F1
151	須恵器	高台付皿	(122)	59	32	灰色	緻密	良	回糸		SD235－F2
152	赤焼土器	坏	125	49	48	赤褐色	緻密	良	回糸		SD37－F1
153	赤焼土器	坏	(128)	53	46	赤褐色	砂混	良	回糸		SD40
154	赤焼土器	坏	124	57	46	灰褐色	緻密	良	回糸		SD37－F1
155	赤焼土器	坏	(137)	(57)		赤褐色	砂粒混	良	回糸	内面漆	SD222
156	赤焼土器	坏		50	(36)	赤褐色	緻密	良	回糸		SD235－F2
157	赤焼土器	坏	(140)							内面漆	SD226－F1
158	須恵器	壺	(140)			灰色	緻密	良		頸部自然釉	SD606
159	須恵器	壺		87～89	(97)	灰色	粗砂混	良		内面ロクロ痕，外面底部叩き	SD606
160	須恵器	坏	(132)	58	36～42	灰色	砂粒混	良	回糸		SD606
161	赤焼土器	坏	(135)	55	50	赤焼色	砂粒混	良	回糸		SD606
162	赤焼土器	坏	(124)	55	54	灰赤褐色	砂粒混	良	回糸	底部ヘラ書き「X」	SD667
163	緑釉陶器	塊	(140)		(30)	黄緑色	白褐色	良		内外、緑釉	SD651
164	緑釉陶器	塊	(140)		(30)	黄緑色	白褐色	良		内外、緑釉	SD667
165	灰釉陶器	手付水瓶			(33)	暗緑色	粗砂混	良		体部に釉ダレ、産地不明	SD666


129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
0
10
cm

第19図　土壙出土土器



第20図　溝状遺構出土土器

（5）墨書・ヘラ描文字土器（第21図，表8，図版17）

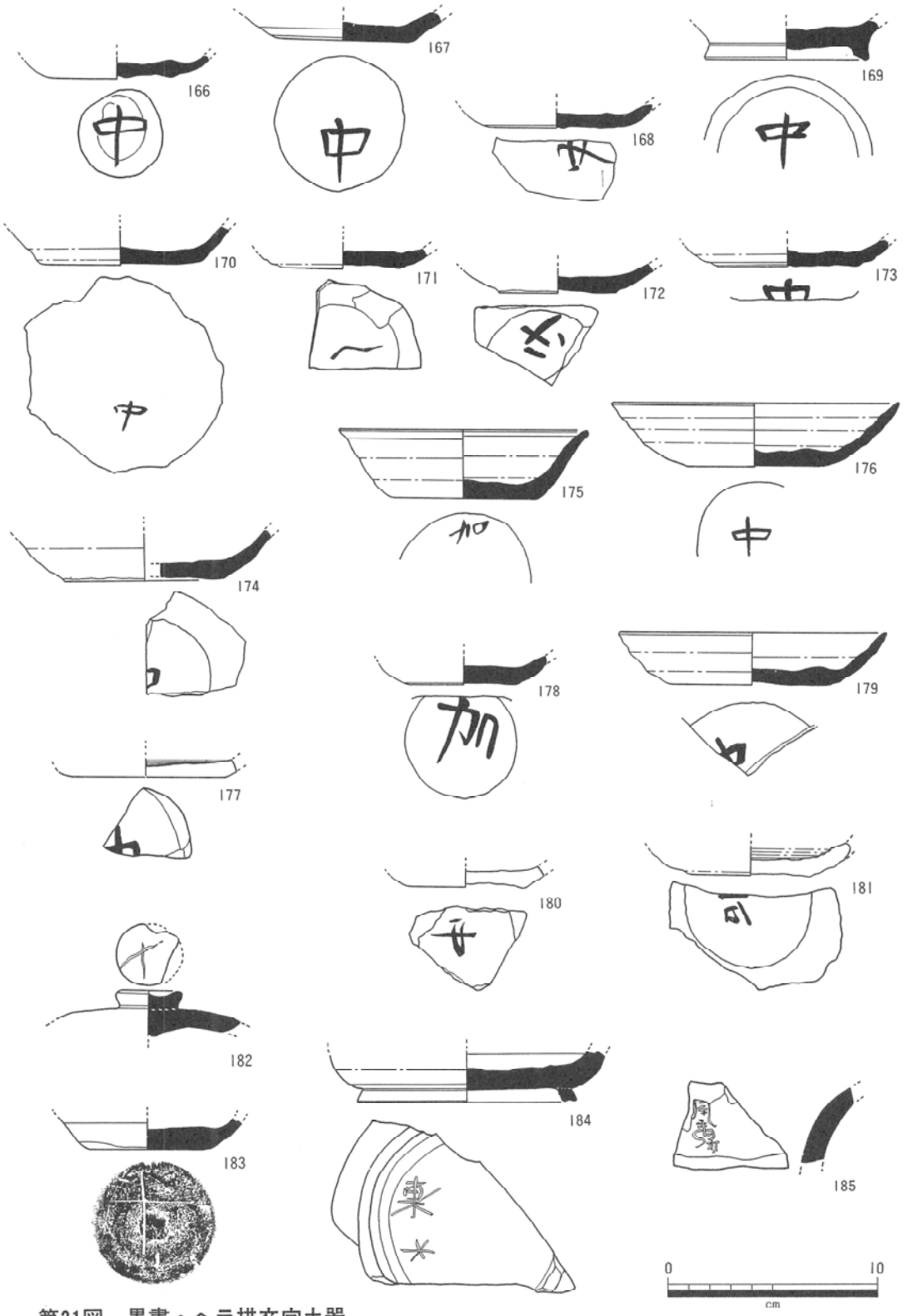
表8　墨書・ヘラ描文字土器

遺物番号	器種		計測値（㎜） 口径	底径	器高	色調	胎土	焼成	底部切離	墨書部位・銘・備考	出土地点
166	須恵器	坏		57	(11)	灰色	緻密	良	ヘラ切	底部「中」	Ⓣ I・A－256－Ⅲ
167				64	10	灰色	緻密	良	回糸	底部「中」	Ⓣ I・K－271－Ⅲ
168				(70)		白灰色	緻密	良	ヘラ切	底部「中」	Ⓣ I・F－276－Ⅲ
169		高台坏		76	(15)	灰色	緻密	良	ヘラ切	底部「中」	X－O
170		坏		72	(18)	灰色	緻密	良	ヘラ切	底部「中」	Ⓣ I・F－266－Ⅲ
171				(58)	(9)	灰色	緻密	良	回糸	底部「一」	I・H・I－153～162－Ⅱ
172				(56)		灰色	緻密	良	回糸	底部「中」カ	50U－251－Ⅲ
173				(64)	10	灰色	緻密	良	ヘラ切	底部「中」カ	Ⓣ I・F－266－Ⅲ
174				(57)		白色	緻密	良	回糸	底部	Ⓣ I・F－255－Ⅲ
175			(109)	72		灰色	緻密	良	ヘラ切	底部「加」	I・J－270－Ⅲ
176			138	63		灰褐色	緻密	良	ヘラ切	底部「中」	I・E－260－Ⅲ・B
177	赤焼土器					赤褐色	緻密	良	回糸	底部　内面漆	I・A－256－Ⅲ
178	須恵器			52～54	(14)	白灰色	緻密	良	回糸	底部「加」カ	I・F－256－Ⅲ
179				76		灰褐色	緻密	良	ヘラ切	底部「中」カ	I・F－261－Ⅲ
180	赤焼土器			55		赤褐色	砂粒混	良	回糸	底部「中」	Ⓣ I・F－266－Ⅲ
181				58	(16)	赤褐色	緻密	良	回糸	底部	I・H・I－153～162－Ⅱ
182	須恵器	蓋		30.5	(21)	灰色	緻密	良		鈕部ヘラ書「×」	Ⓣ I・P－261－Ⅲ
183		坏		58		灰色	砂粒混	良	ヘラ切	底部ヘラ書「×」	I・H－142－Ⅲ
184		壺		99	(22)	灰色	粗砂混	良	ヘラ切	底部ヘラ書「東水」	I・B－261－Ⅱ
185		甕				灰褐色	砂粒混	良		体部ヘラ書き	Ⓣ 50P－266－Ⅲ

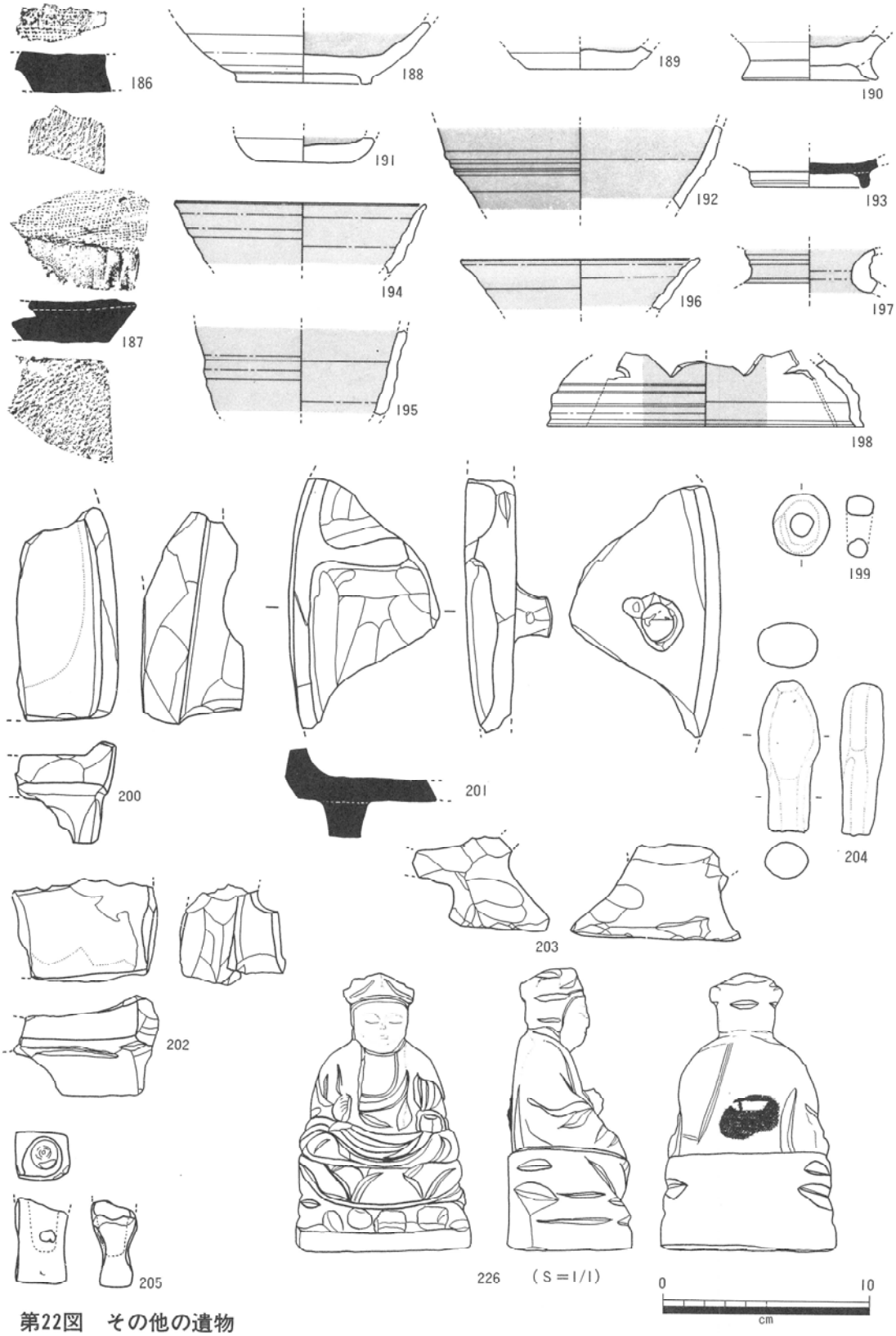
（6）その他の遺物（第22図，表9，図版18）　平瓦（第22図186・187），漆塗土器（188～192），内面に金泥塗りの須恵器（193），緑釉陶器（194～196），風字硯（200～202）等がある。226は銅製の地蔵菩薩座像で鋳造品である。1次調査精査地区北西隅ＩＧ—256Ⅲ層から単独で出土したもので，時期的には江戸時代まで下る可能性をもつ。

表9　その他の遺物

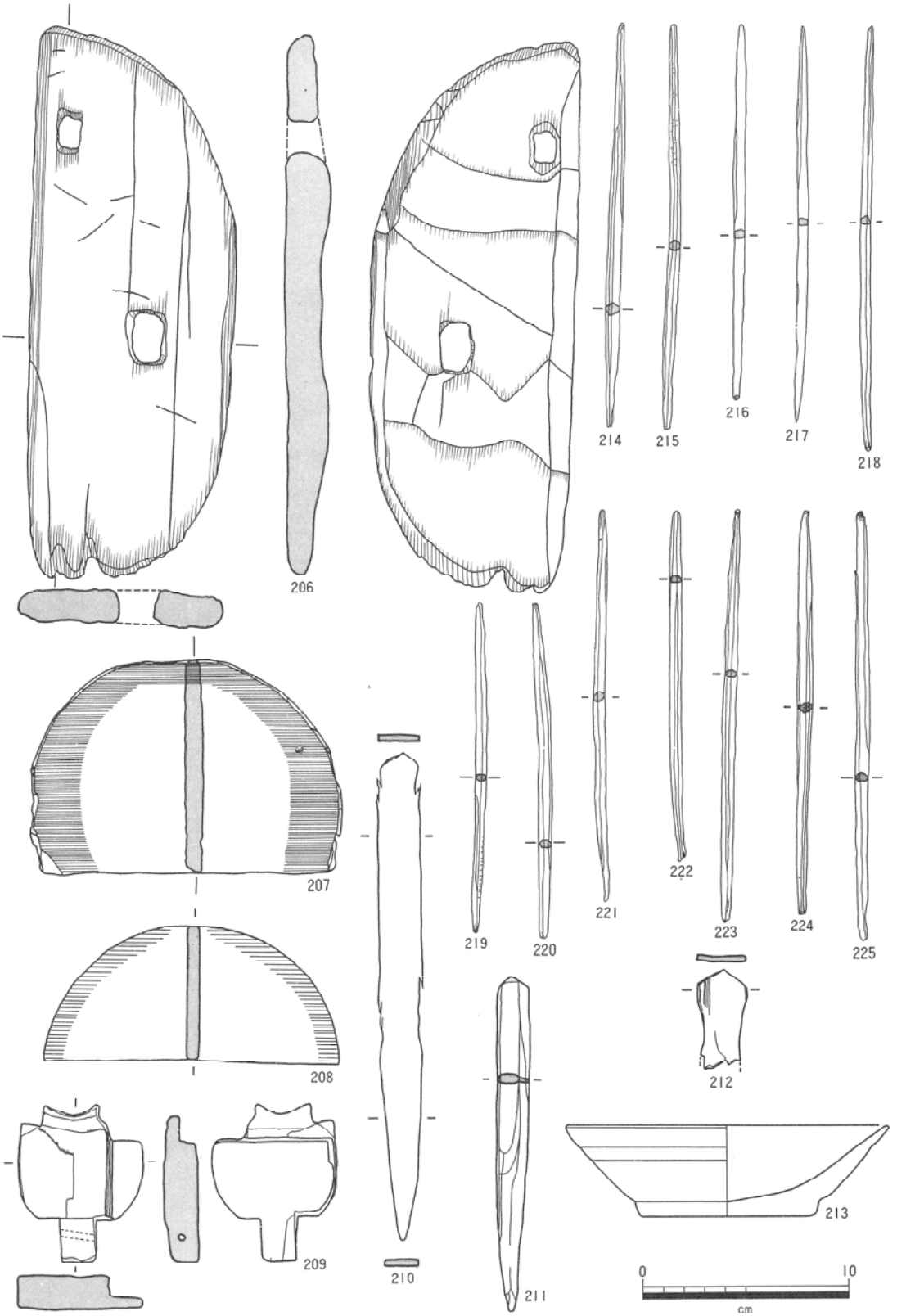
遺物番号	器種		計測値（㎜）	色調・形態・成形手法の特徴・他	出土地点
186	平瓦		残長47，残幅18，厚18.5	灰色，凹面布目圧痕，凸面縄目圧痕	50・V・267－Ⅲ
187			残長61，残幅20	灰色，凹面布目圧痕，凸面縄目圧痕	50・Y・269－Ⅲ
188	赤焼土器	高台皿	底径64，残高27	灰褐色，胎土 緻密，焼成 良，切り離し 回糸，外面なで，内面黒 漆	I・A・255
189		坏	底径52，残高9	赤灰色，胎土，砂粒混，焼成 良，切り離し ヘラ切り，内部漆	I・A・251－ⓉⅢ
190	赤焼土器	高台坏	残底径63	赤灰色，胎土 緻密，焼成 良，内面 外面漆	Ⓣ I・A 255－Ⅲ
191		坏	残底径50	茶褐色，胎土 緻密，焼成 良，切り離 糸切，内面漆	Ⓣ I・F 271－Ⅲ
192				茶褐色，胎土 緻密，焼成 良，内面 外面漆	Ⓣ I・F 255－Ⅲ
193	須恵器	高台坏	残底径55	灰褐色，胎土 緻密，焼成 良，内面に金泥塗り	I・B・261－Ⅱ
194	緑釉陶器	碗	口径（122）残高30	緑釉，胎土 緻密，焼成 良，内面 外面緑釉	Ⓣ I・A 256－Ⅲ
195			残高40	緑釉，胎土 緻密，焼成 良，内面 外面緑釉	Ⓣ I・A 251－Ⅲ
196			口径（116）残高30	緑釉，胎土 緻密，焼成 良	Ⓣ I・A 261・Ⅱ
197	灰釉陶器		口径（63）残高20.5	灰褐色，胎土 緻密，焼成 良，コ緑釉付着	Ⓣ I・F 276－Ⅲ
198	青磁	香炉蓋	口径（155）残高30	暗緑黄色，胎土灰色で緻密，透彫香炉，越州窯	X－O
199	土製品		長29，径10～13、口径11	灰褐色，胎土 緻密，焼成 良，環状	I・J 273－Ⅱ
200	陶硯	風字硯	長100，幅49，高48～21	灰色	I・E 256Ⅲ
201	陶硯	風字硯	長122，幅73，高17～42	灰色，風字変形 二面硯	50V 267Ⅲ
202		風字硯	長68，幅49	灰色	I・F 255Ⅲ
203	須恵器	脚部	幅82，高45	灰色	I・E 268Ⅲ
204	石製品	石棒	長83，幅22～29，厚21～29	灰色	50T・275Ⅲ
205	石製品	加工石	長50，幅52，厚27	明褐色	I・A 256Ⅲ
226	金属製品	仏像	高41，台座幅26，同厚18	淡青緑色，銅製鋳造品，背面にニカワ状の物付着	I G・256Ⅲ



第21図　墨書・ヘラ描文字土器


186
188
189
190
191
192
193
194
196
197
187
195
198
199
200
201
204
203
202
205
226
(S＝1/1)
0
10
cm

第22図　その他の遺物


206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
0
10
cm

第23図　木製品

III　俵田遺跡

1　調査の経過（第24図，図版20）

俵田遺跡は，山形県飽海郡八幡町大字岡島田字俵田および扇田に所在し，岡島田部落のすぐ南方に位置する。古くから土器などが出土することで知られていたが，正式には後田遺跡と同じく昭和48年に山形県教育委員会が実施した分布調査によって確認されたものである。地形的には庄内北部河間低地にあたり，標高10m前後の微高地に立地する。地目はほとんど水田であるが，一部道路敷や神社地も含まれる。

この地域に昭和53年から庄内総合パイロット事業がかかることになったため，県教育委員会が関係諸機関と協議の結果，パイロット事業の年次に合わせ，事前に発掘調査を実施することになったものである。調査は山形県教育委員会が主体になり，八幡町教育委員会の協力を得て，昭和53年４月17日から同年６月９日までの実質34日間行なった。

発掘区の地区割りは，太田神社南西隅の農道基準杭を仮原点にし，南北軸線を磁北方向に取っている。グリッドの最小単位は２m四方である。調査はまず対象地区全体を50m毎に坪掘りし，つぎに幅２mのトレンチ掘りを行なって，最終的に４つの精査地区を設けた。

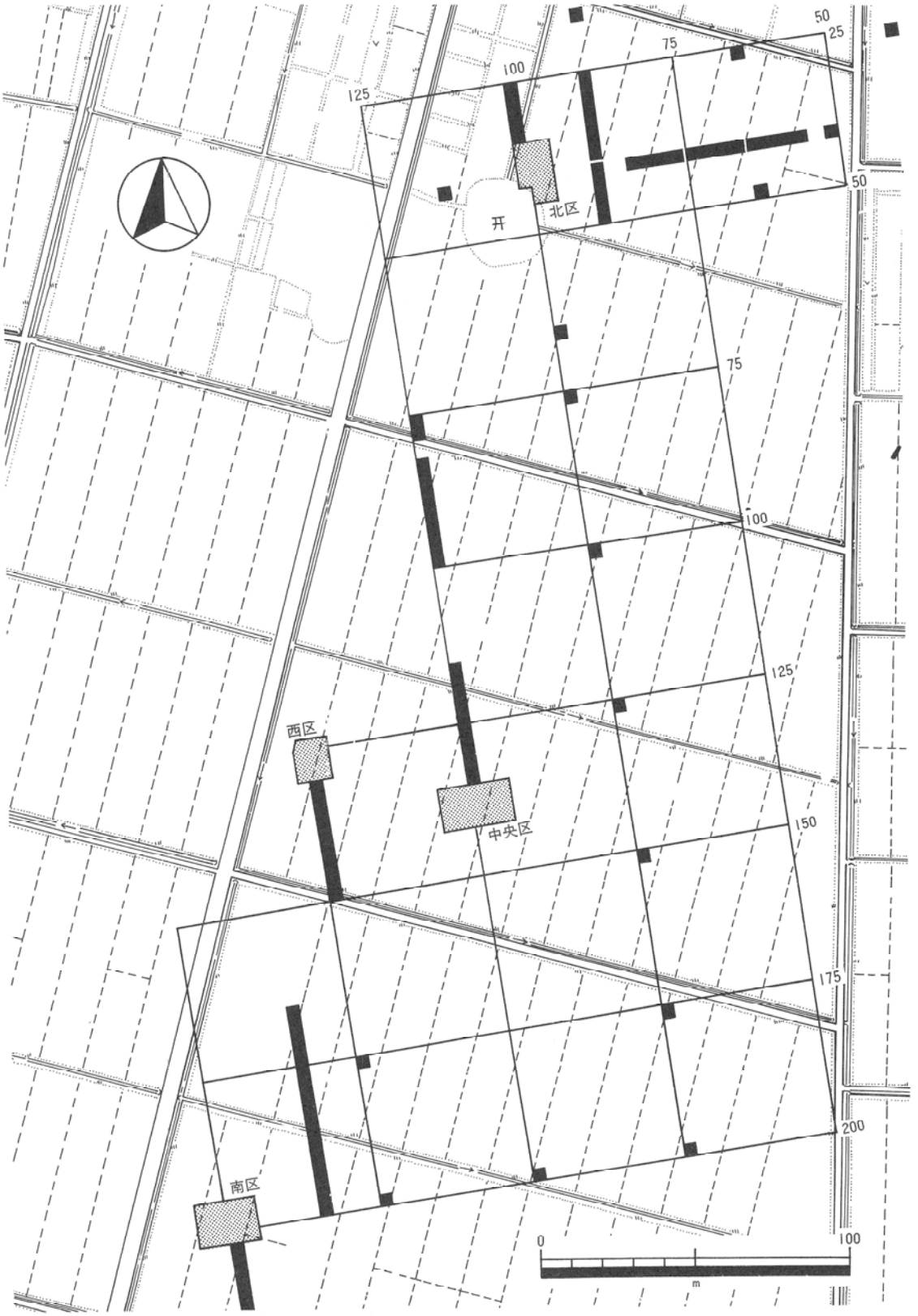
2　遺構と遺物（図版20～22）

調査の結果，平安時代に属する竪穴住居跡１棟，掘立柱建物跡２棟，土壙数基，溝状遺構７条などが検出された。遺構および遺物は４つの精査地区のうち中央区にもっとも多い。

ＳＴ１住居跡は，南精査地区で検出されたもので，長径4.34m，短径2.92mの隅丸方形を呈する。遺構検出面から床面までの深さは，上面が水田耕作等によって削平されているためか，最深部で６cmと浅い。主軸の方位は真北に対しＥ―18°00′―Ｎを測る住居跡中央やや北西寄りに地床炉と思われる焼土があり，主柱穴は７本で構成される。床面ないし床面直上から，約10個体分の須恵器坏，赤焼土器坏，同甕等が出土している。時期は平安時代10～11世紀頃と推定される。

ＳＢ24・25建物跡は，中央精査地区で検出された２棟の掘立柱建物跡である。両建物とも梁行２間，桁行３間で構成されるようであるが，柱間距離が2.4～3.0mと大きい。柱穴の中には一部柱根を有するものもある。建物跡付近からは須恵器坏・甕，赤焼土器坏・甕等が出土している。須恵器坏は口径に比して底径の大きいもので，底部切り離しはヘラ切りと回転糸切りの２種類がある。時期は平安時代９世紀後半頃と推定される。

このほか遺物として箸・火切臼・漆器等の木製品，土錘・紡錘車，「西」と読める墨書土器なども出土している。時期はほとんどが平安時代に推定される。



第24図　俵田遺跡グリッド配置図

Ⅳ　まとめ

本書には山形県教育委員会が昭和53・54年度に実施した八幡町後田遺跡と同俵田遺跡の報告を掲載した。最上川右岸から日向川までの平野部には，平安時代の出羽国府と考えられてる城輪柵跡を中心として，おおよそ東西4,320m（約36町），南北7,920m（約66町）の地割りが想定され，その中に地方官衙や掘立柱建物群が計画的に配置されたようである。

後田遺跡は、城輪柵跡内郭から南に360m（３町），東に1,200m（10町）の場所に位置し，寺院跡などの公的施設と考えられる堂の前遺跡の南西240m（２町）にあたる。後田遺跡で検出された遺構は，整地層の上下関係や出土遺物の検討から３つの時期に大別できる。

第Ⅰ期（10世紀中葉）は整地層の下面から検出される遺構を主とするもので，ＳＢ203・484建物跡，ＳＥ210井戸跡などがある。柱穴の埋土は暗黄褐色粘質土で，掘り方が70cm前後と大きい。建物跡の主軸方向は真北に対し20度西に振れる。ＳＫ124・148土壙，ＳＤ207溝状遺構も出土土器からみてほぼ同じ時期にあたる。「中」の墨書のある須恵器坏も本期の遺構に多い。

第Ⅱ期（10世紀後半）は整地層を掘り込んで作られている遺構を主とするもので，ＳＢ14・201・202建物跡などがある。柱穴の埋土は暗灰褐色微砂を基本とし，掘り方の大きさは50cm前後である。建物跡の主軸方向は真北に対し６～９度西に振れる。ＳＤ40・234・235溝状遺構，ＳＫ441落ち込み遺構，ＳＫ19・25・205・209・629土壙も出土土器からみてほぼ同じ時期にあたる。ＳＢ14建物跡付近からは風字硯や緑釉陶器，金泥塗りの須恵器坏等が出土しており，この時期の中心的な建物であったことがうかがえる。

第Ⅲ期（11世紀）は整地層が認められない場所の遺構を主とするもので，ＳＢ482・438・439・444・459・416・604建物跡などがある。柱穴の埋土は黒褐色粘質土に黄褐色微砂が混るもので，掘り方が30cm前後と小さい。建物跡の主軸方向は真北に対し１～４度西に振れる。ＳＥ18井戸跡・ＳＫ441・602・632土壙も同じ時期にあたる。

１次調査精査地区の南西で長さ20mにわたって検出されたＳＡ204板列がある。掘り方内から土器の出土がないため遺構の時期は不明であるが，第Ⅱ期に属するＳＫ205土壙によって切られていることから，第Ⅱ期ないし第Ⅰ期の遺構と考えられる。ＳＡ204板列はさらに北へ57m延長したグリッドでも検出されており，第Ⅰ・Ⅱ期の建物跡をとり囲む板塀のような施設の基部をなすものと考えられる。同様な板塀は堂の前遺跡にもみられる。

後田遺跡は，平安時代10世紀中葉から11世紀にかけての堂の前遺跡等と関連する計画的な施設と推定される。一方俵田遺跡は平安時代９世紀から10世紀前半頃を主体とする一般的な集落跡と考えられ，竪穴住居跡の存在なども含め時期や性格について分析が必要である。

参　考　文　献

1　山形県教育委員会「庄内広域営農団地農道整備事業関連遺跡分布調査報告書」　山形県埋蔵文化財調査報告書第１集　1974

2　平川　南「出羽国府論」　多賀城跡調査研究所研究紀要Ⅳ　1977

3　山形県「土地分類基本調査　酒田　５万分の１」　1978

4　阿部義平「古代出羽国の発掘調査―堂の前遺跡とその周辺―」　日本歴史第216号 1978

5　佐藤禎宏「八森遺跡第１次・第２次発掘調査報告」　八幡町教育委員会　1978

6　小野　忍「城輪柵遺跡の性格論をめぐって」　酒田市教育研究所第30号　1978

7　山形県教育委員会・八幡町教育委員会　「後田遺跡発掘調査現地説明会資料」　1978

8　山形県教育委員会「後田遺跡第２次調査説明資料」　1979

9　佐藤禎宏「仁和三年条の国府移転に関する覚書」　庄内考古学第16号　1979

10　川崎利夫「城輪柵周辺の諸遺跡―最近の発掘調査から―」羽陽文化第112号 1980

11　尾形與典他「堂の前遺跡昭和53・54年度調査略報」　山形県埋蔵文化財調査報告書第30集　1980

12　川崎利夫「出羽国分寺はどこにあったか」　羽陽文化第114号　1982

13　佐藤庄一他「農林事業関係遺跡発掘調査報告書　地正面遺跡」　山形埋蔵文化財調査報告書第51集　1982

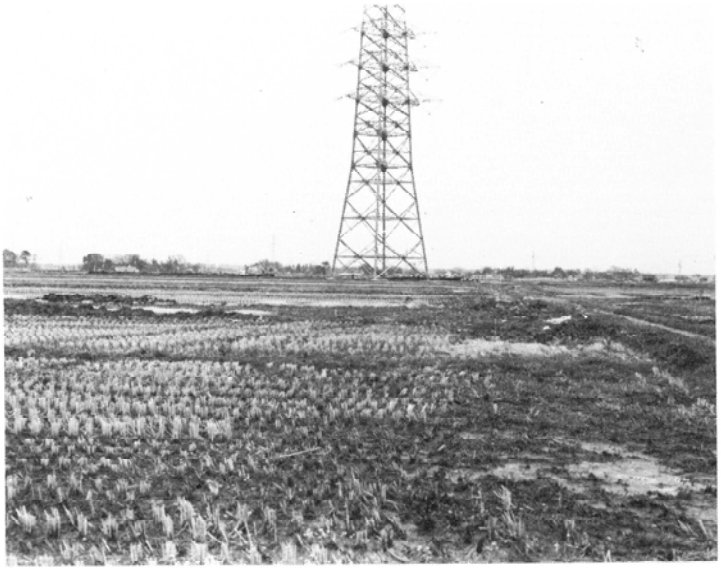
14　佐藤庄一他「農林・土木事業関係遺跡発掘調査報告書　上ノ田遺跡」　山形県埋蔵文化財調査報告書第52集　1982

15　野尻　侃他「北田遺跡第２次発掘調査報告書」　山形県埋蔵文化財調査報告書第53集　1982

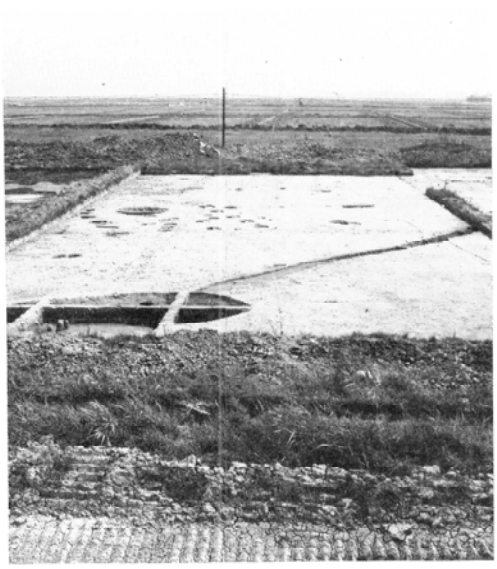
16　山形県教育委員会・山形県埋蔵文化財緊急調査団「庭田遺跡調査説明資料」　1982

図　　版

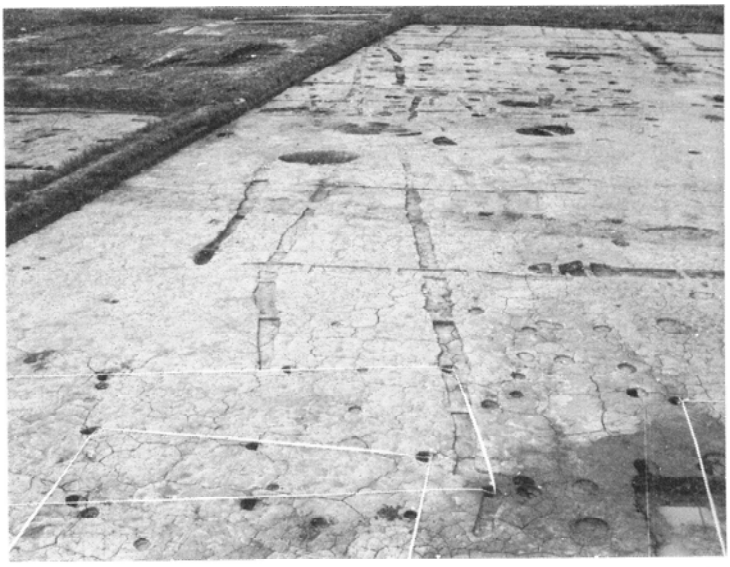
図版　1　　後田遺跡



後田遺跡遠景（東から）



1次調査精査区全景（北から）

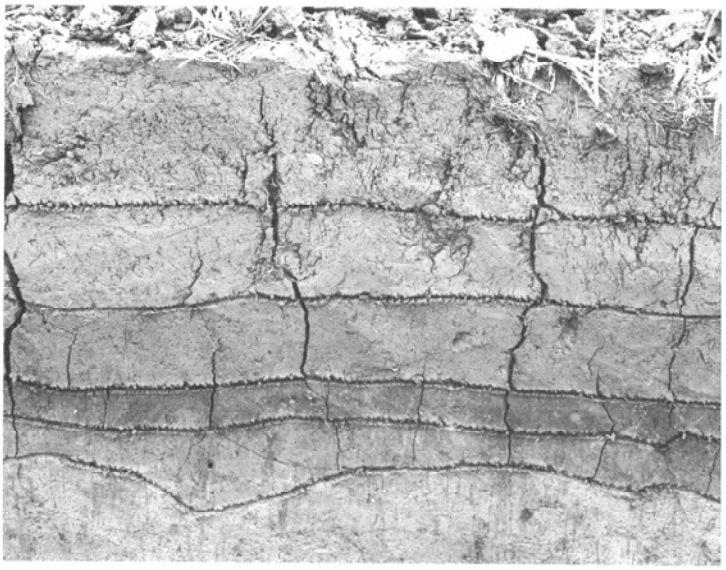


1次調査精査区近景（南から）

図版　2　　後田遺跡

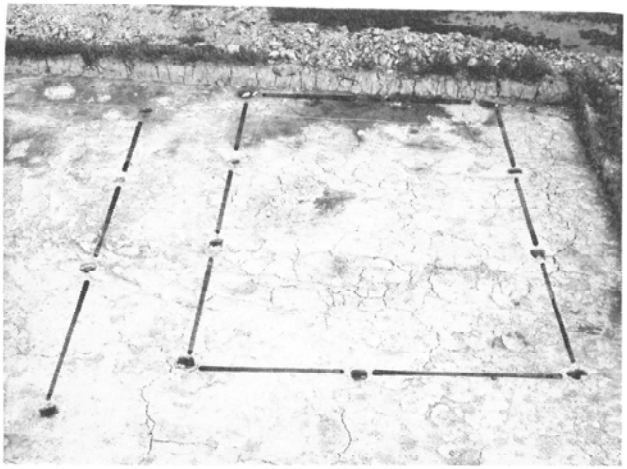
2次調査発掘風景（北から）

2次調査精査区全景（南から）

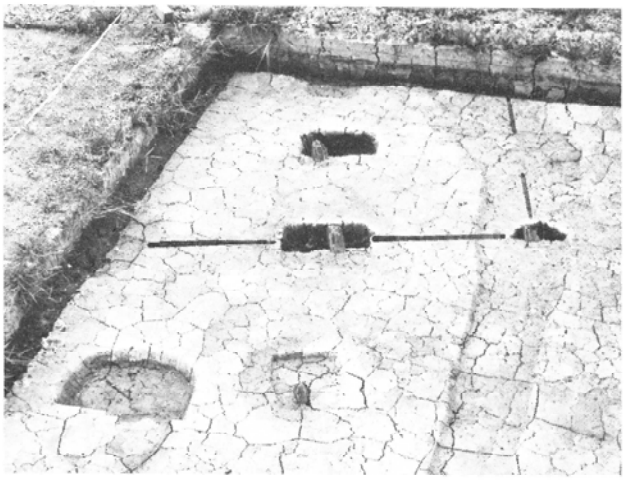


2次調査土層断面

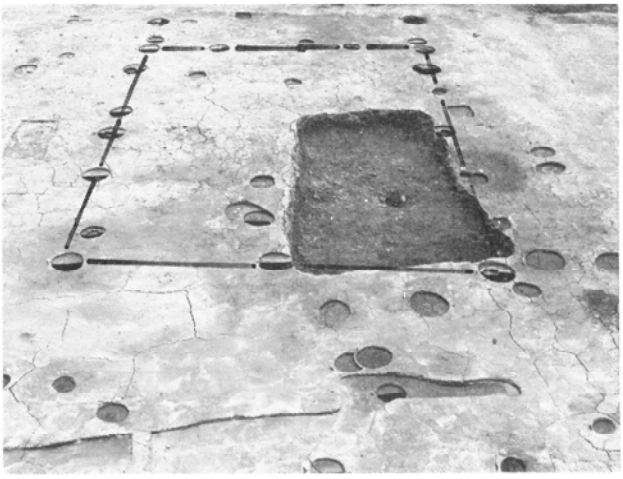
図版　3　　後田遺跡



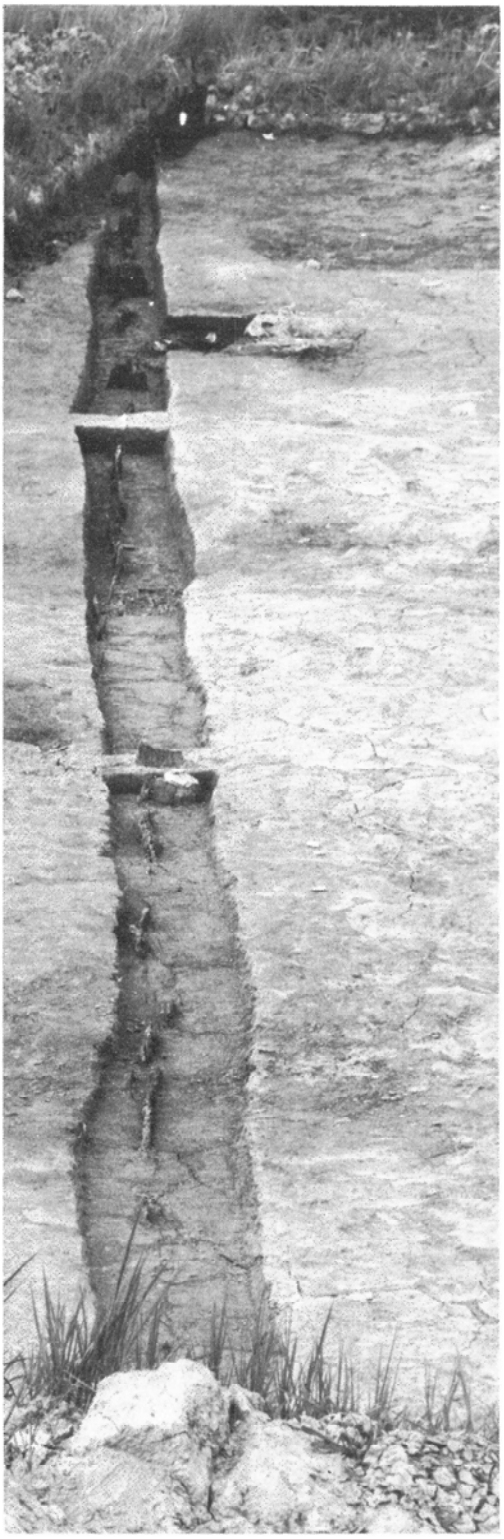
ＳＢ444建物跡



ＳＢ203建物跡

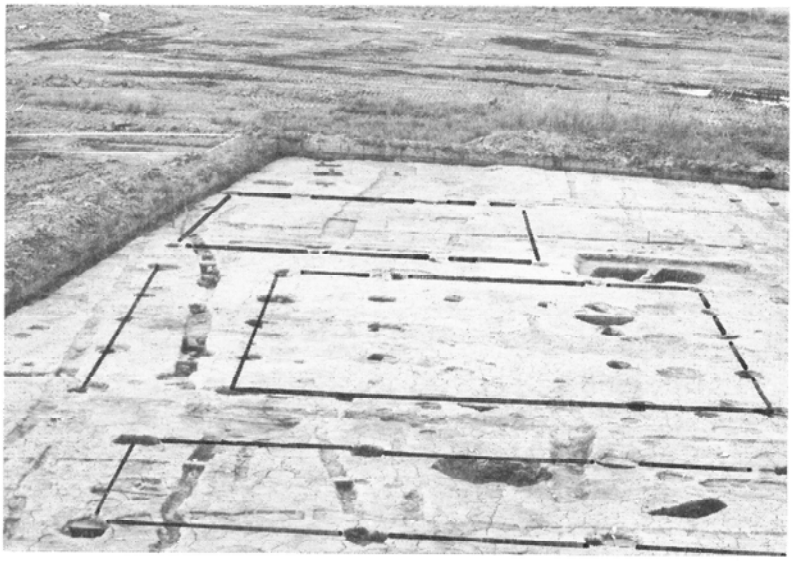


ＳＢ438・439建物跡

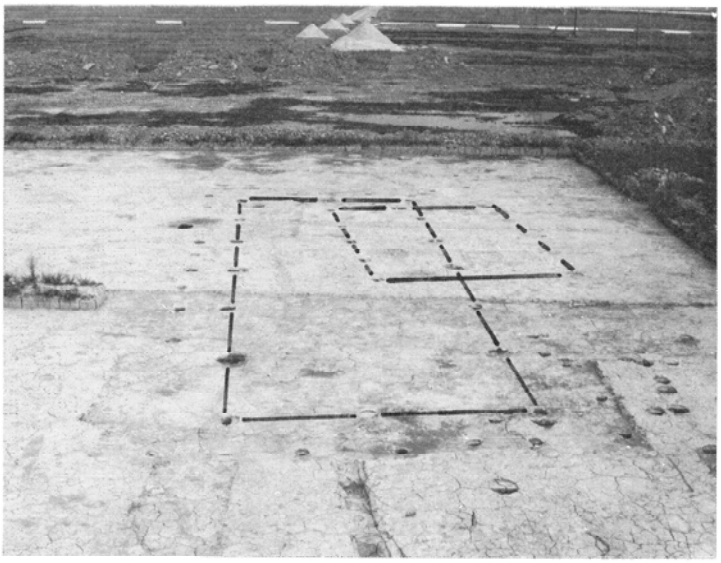


◀ ＳＡ204板列

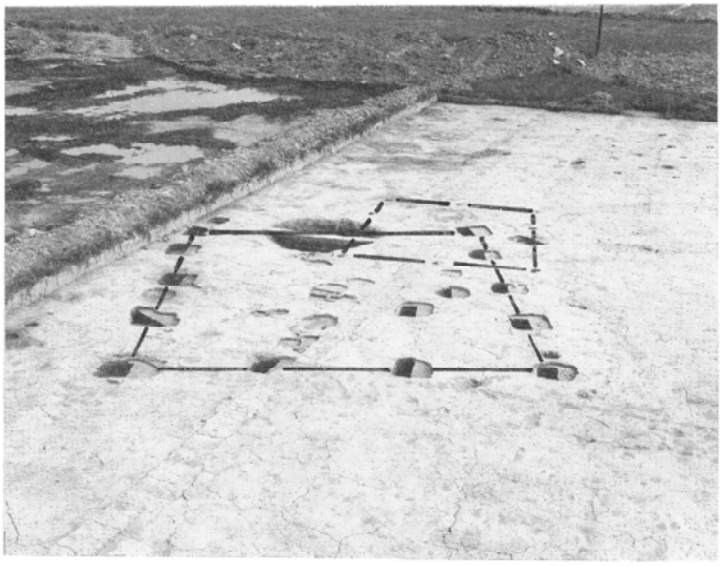
図版　4　後田遺跡



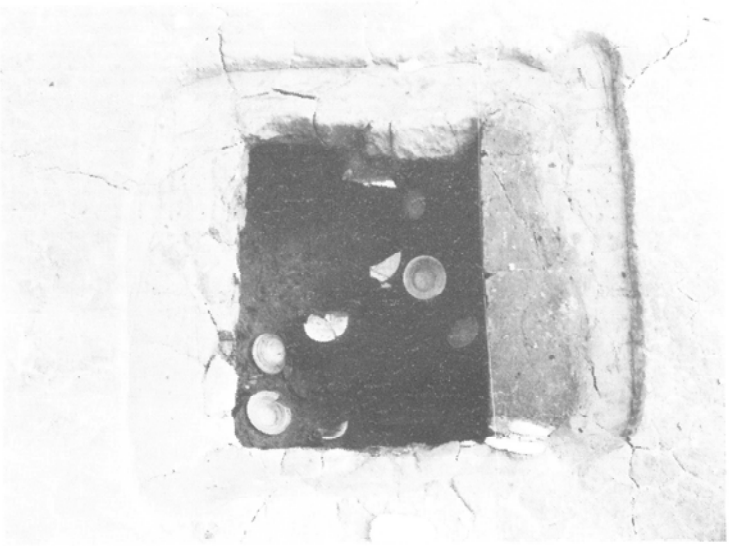
ＳＢ14・201建物跡



ＳＢ482・483建物跡



ＳＢ459・484建物跡

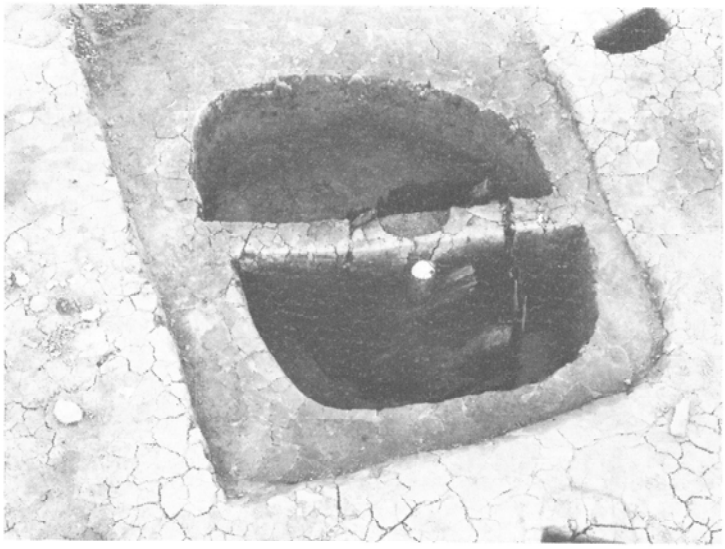


ＳＥ18井戸跡全景

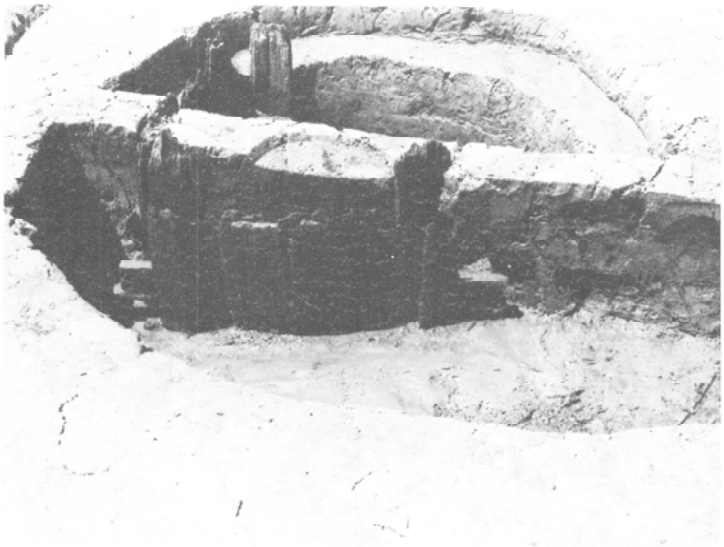
ＳＥ18井戸跡土層断面

ＳＥ18井戸跡下層土器出土状況

図版　6　　後田遺跡



ＳＥ210井戸跡（西から）



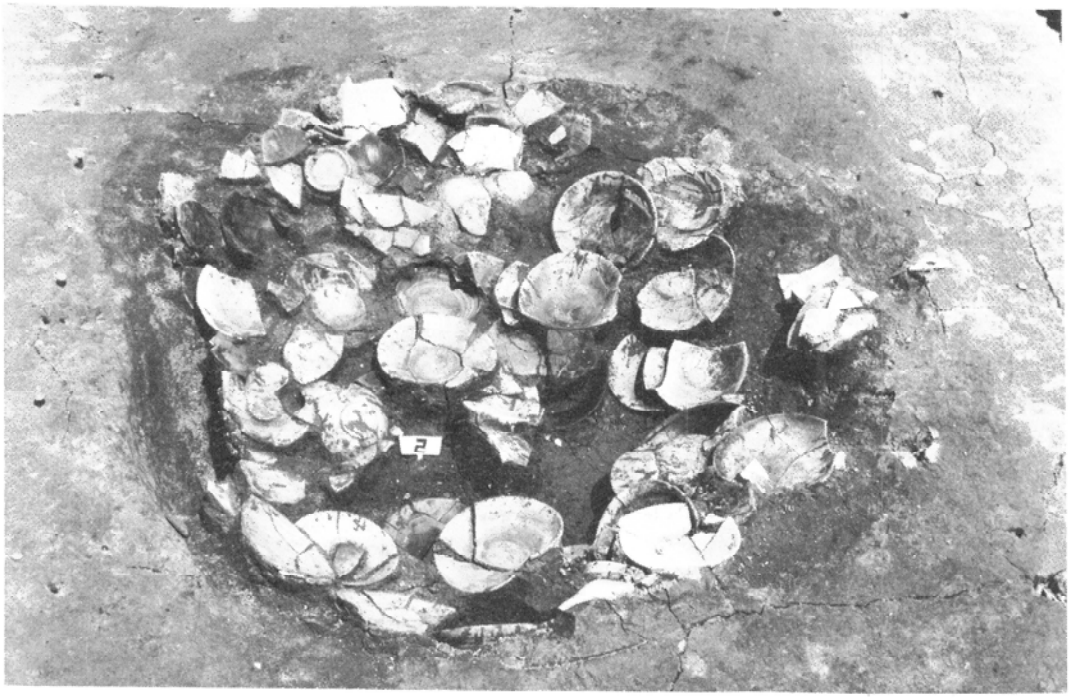
ＳＥ210井戸跡（東から）

ＳＫ19土壙

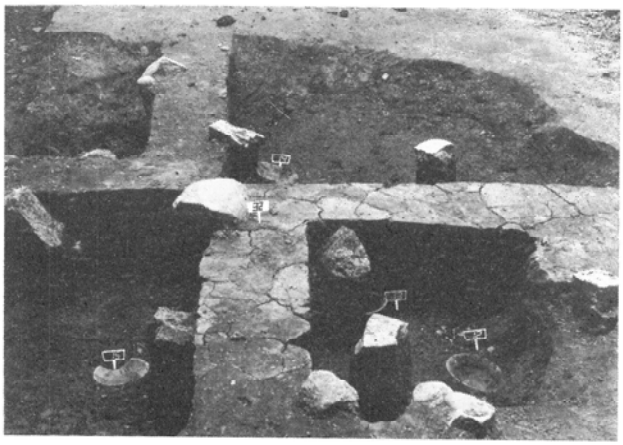
ＳＤ235溝状遺構・
ＳＫ441土壙

ＳＫ441土壙近景

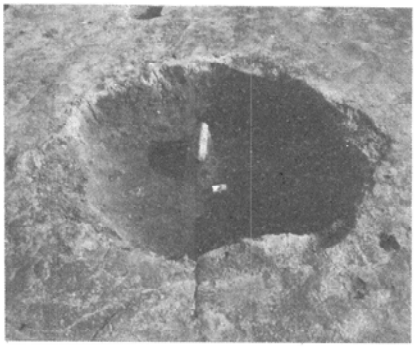
ＳＫ209土壙



ＳＫ602土壙土器出土状況

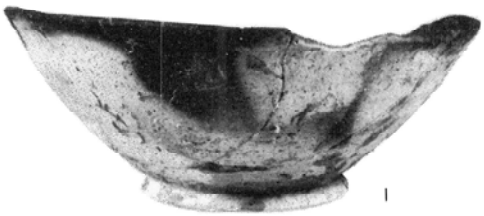


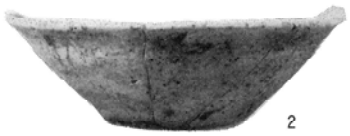
ＳＫ602土壙完掘状況

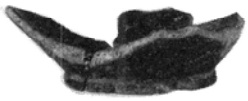


ＳＫ632土壙

ＳＫ680土壙


1


2

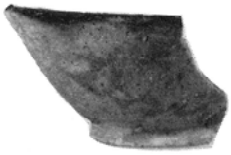

3

4

5

6

7


8

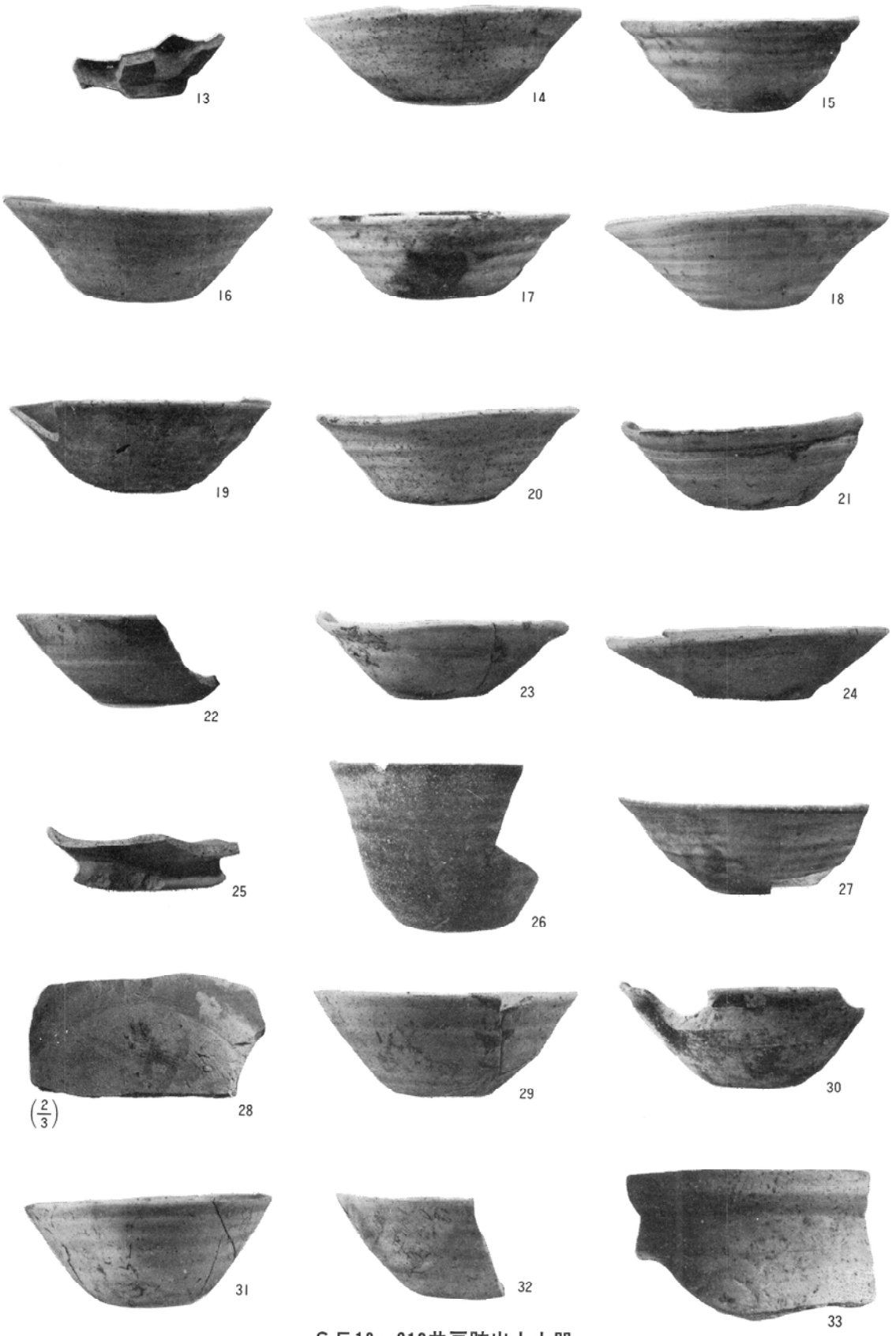
9

10

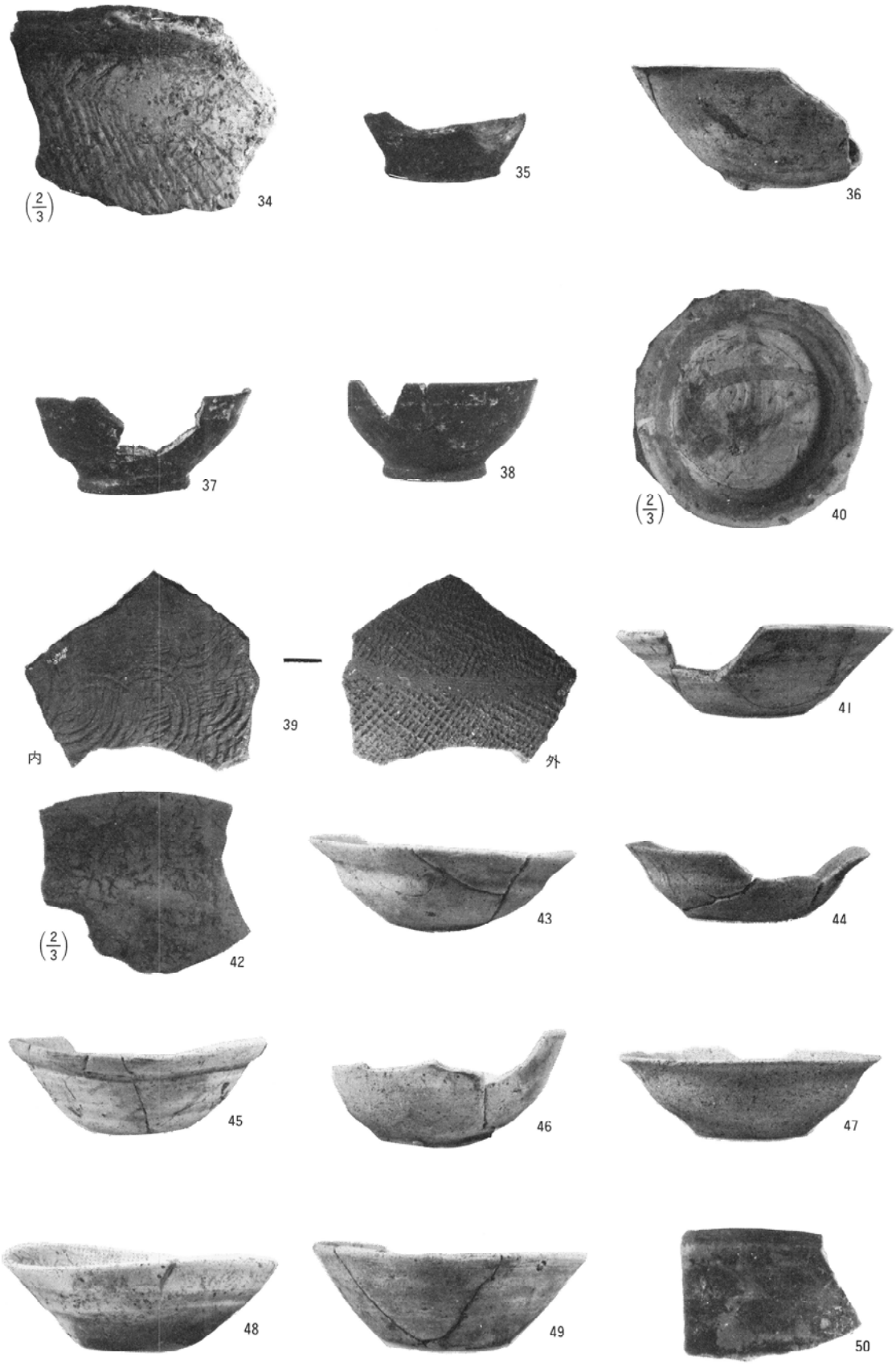
11

12

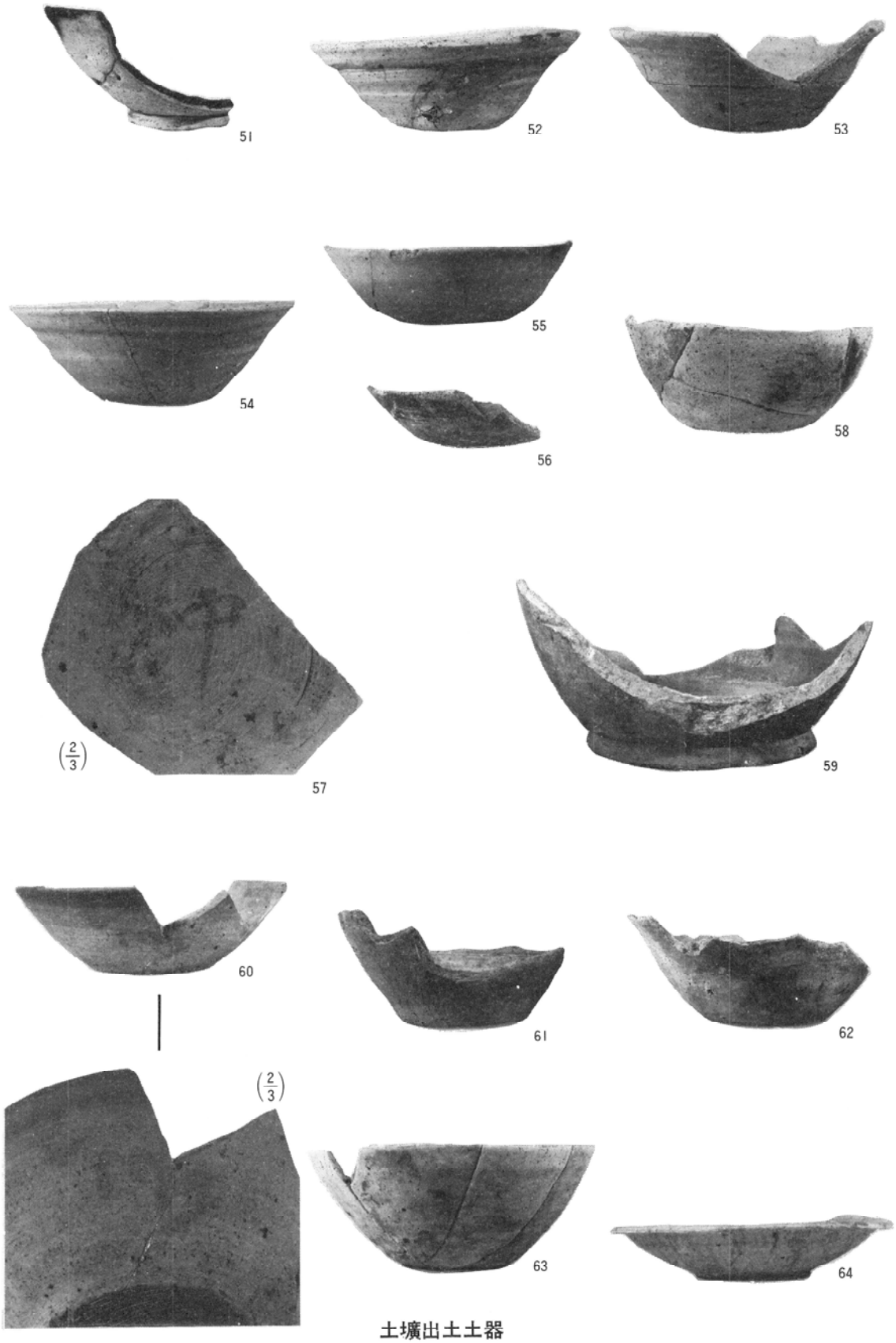
掘立柱建物跡出土土器



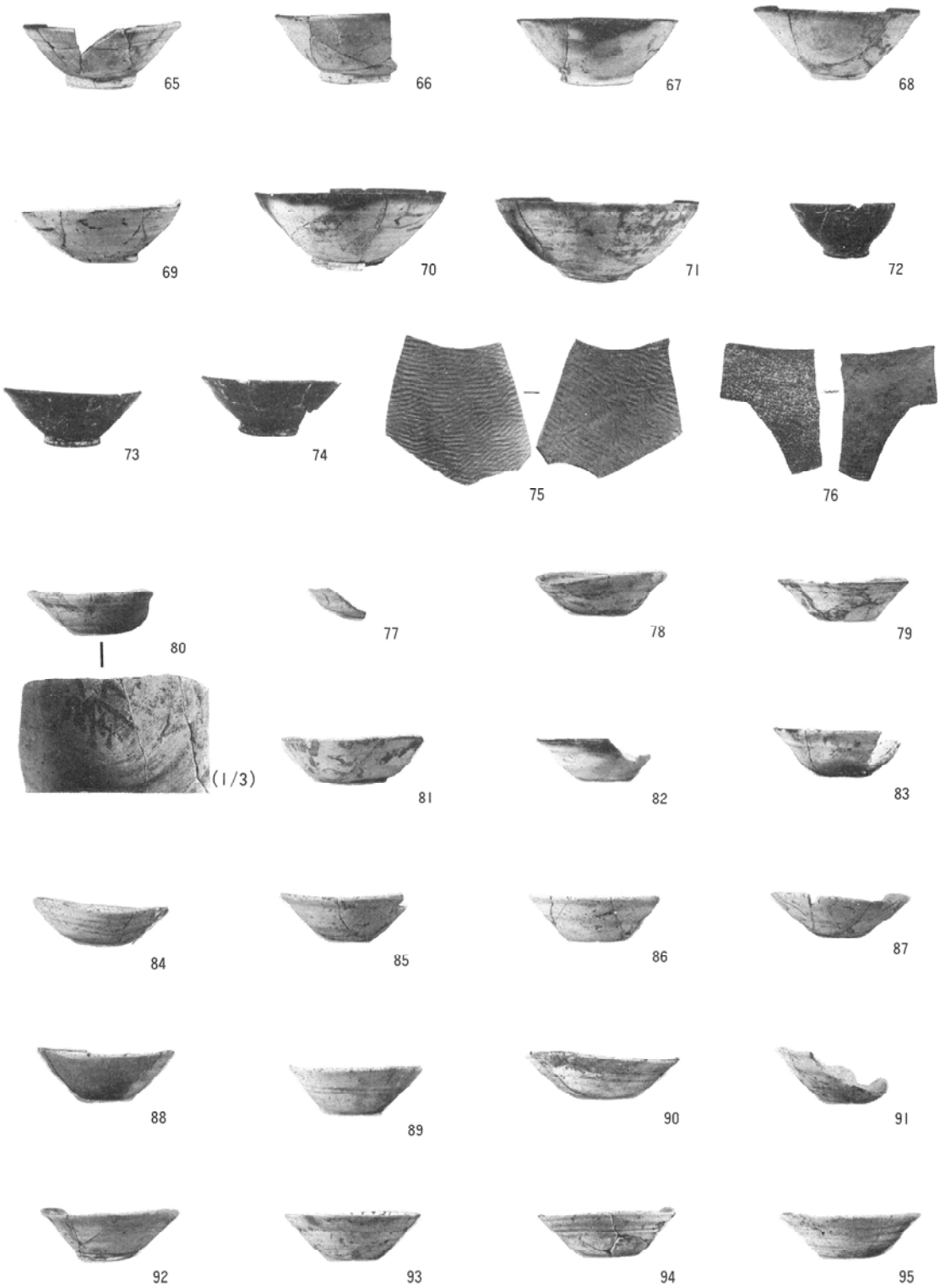
ＳＥ18・210井戸跡出土土器



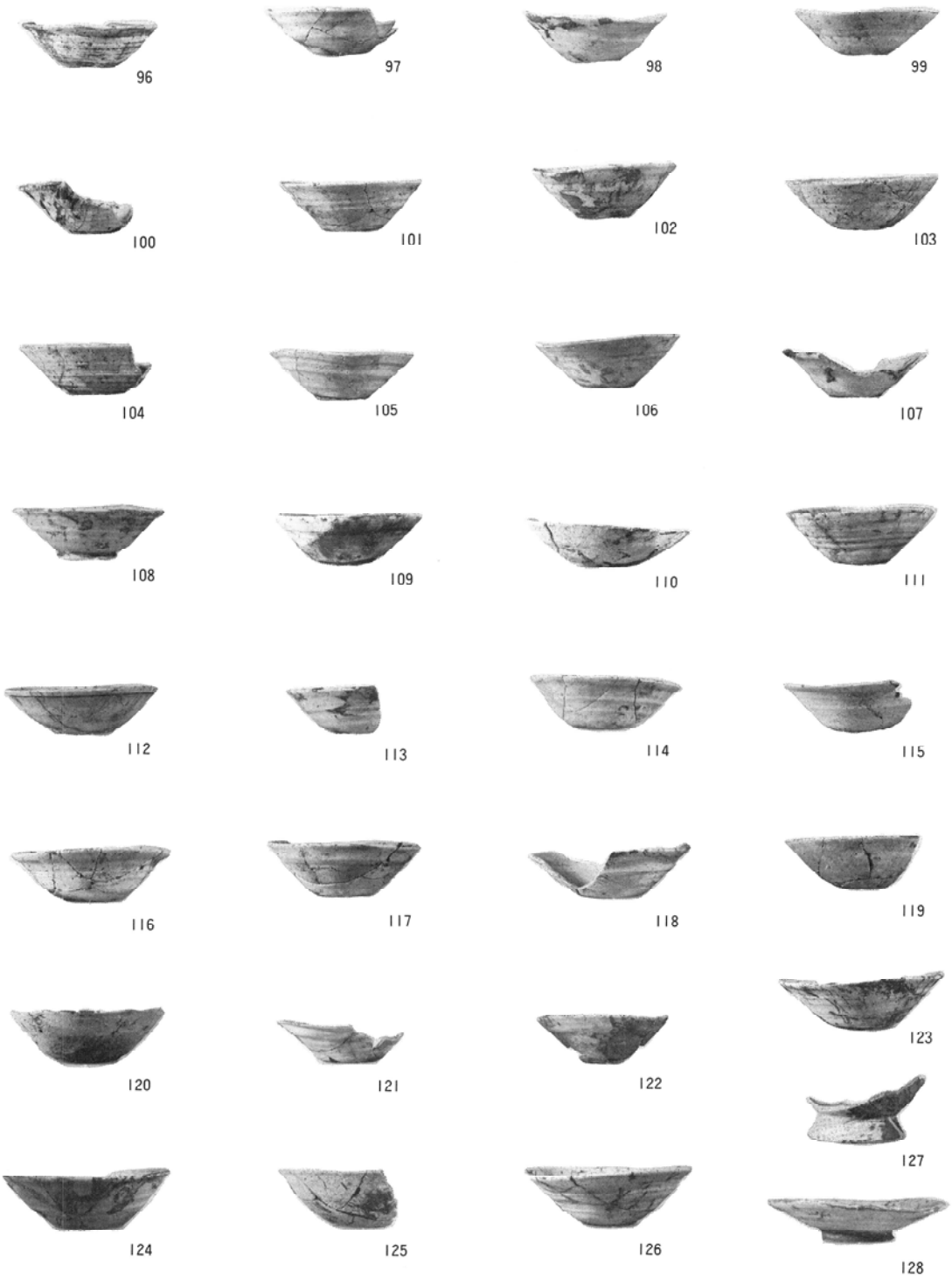
ＳＫ441土壙出土土器



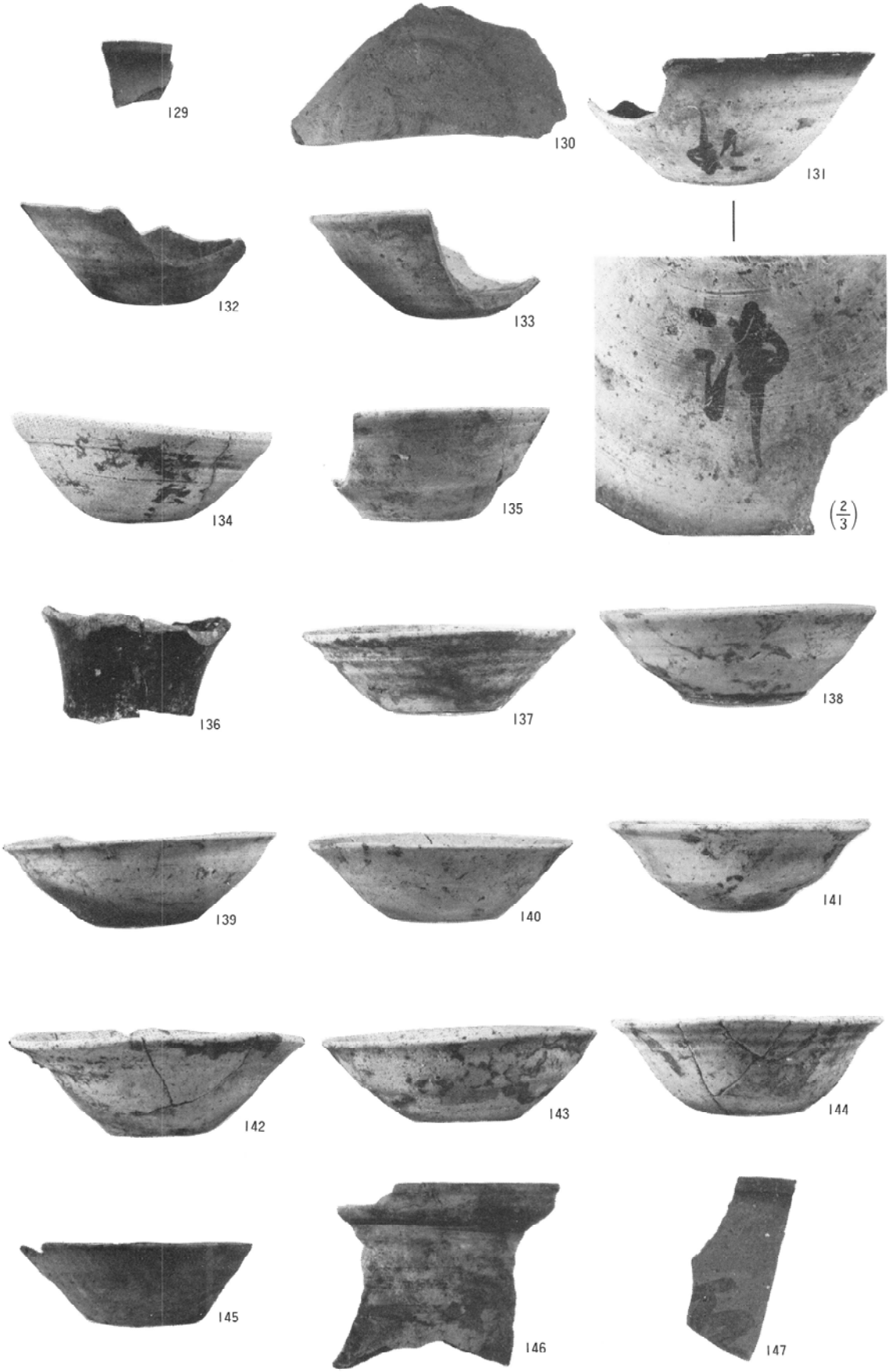
土壙出土土器



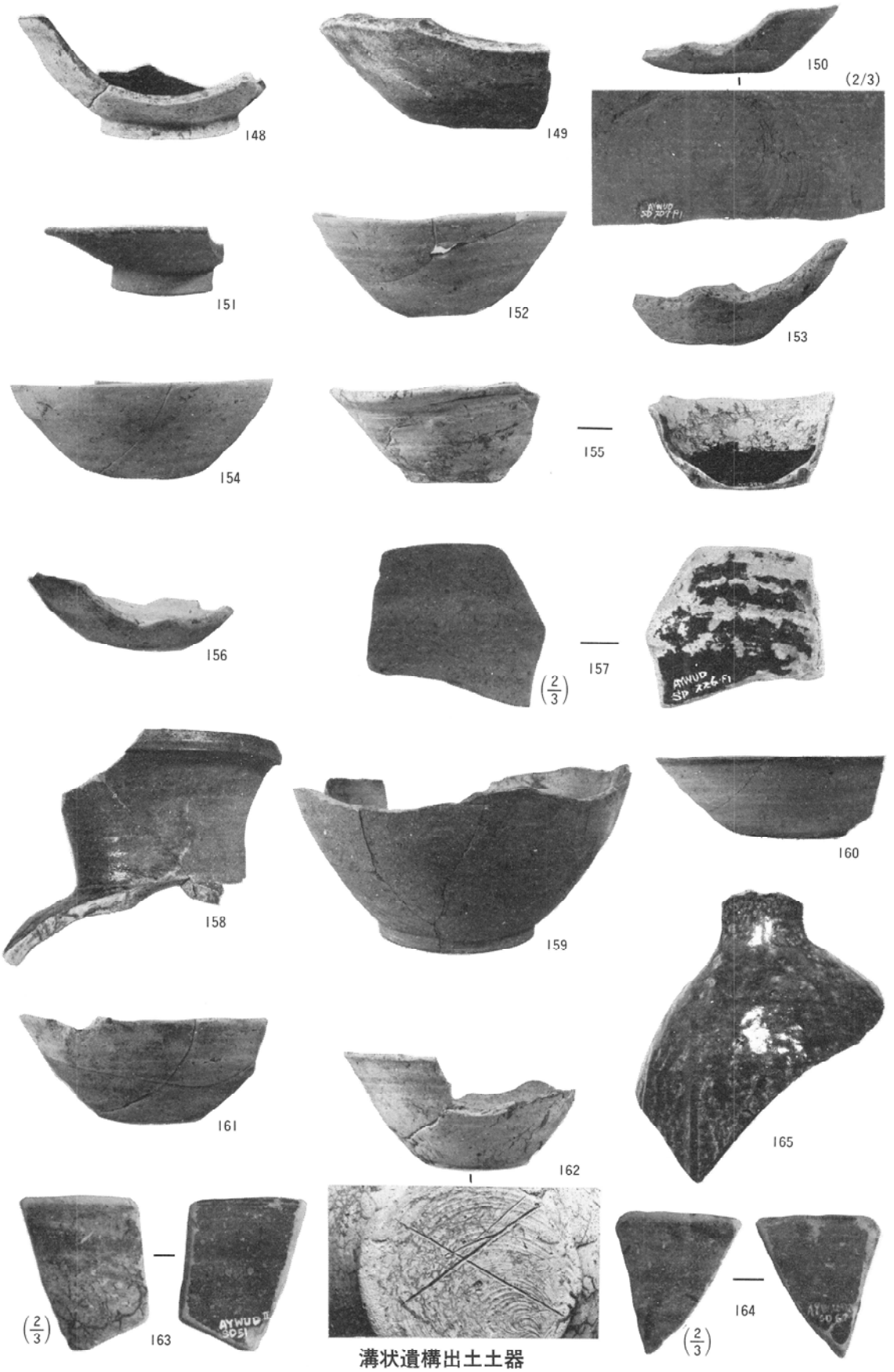
ＳＫ602土壙出土土器(1)　(1/6)



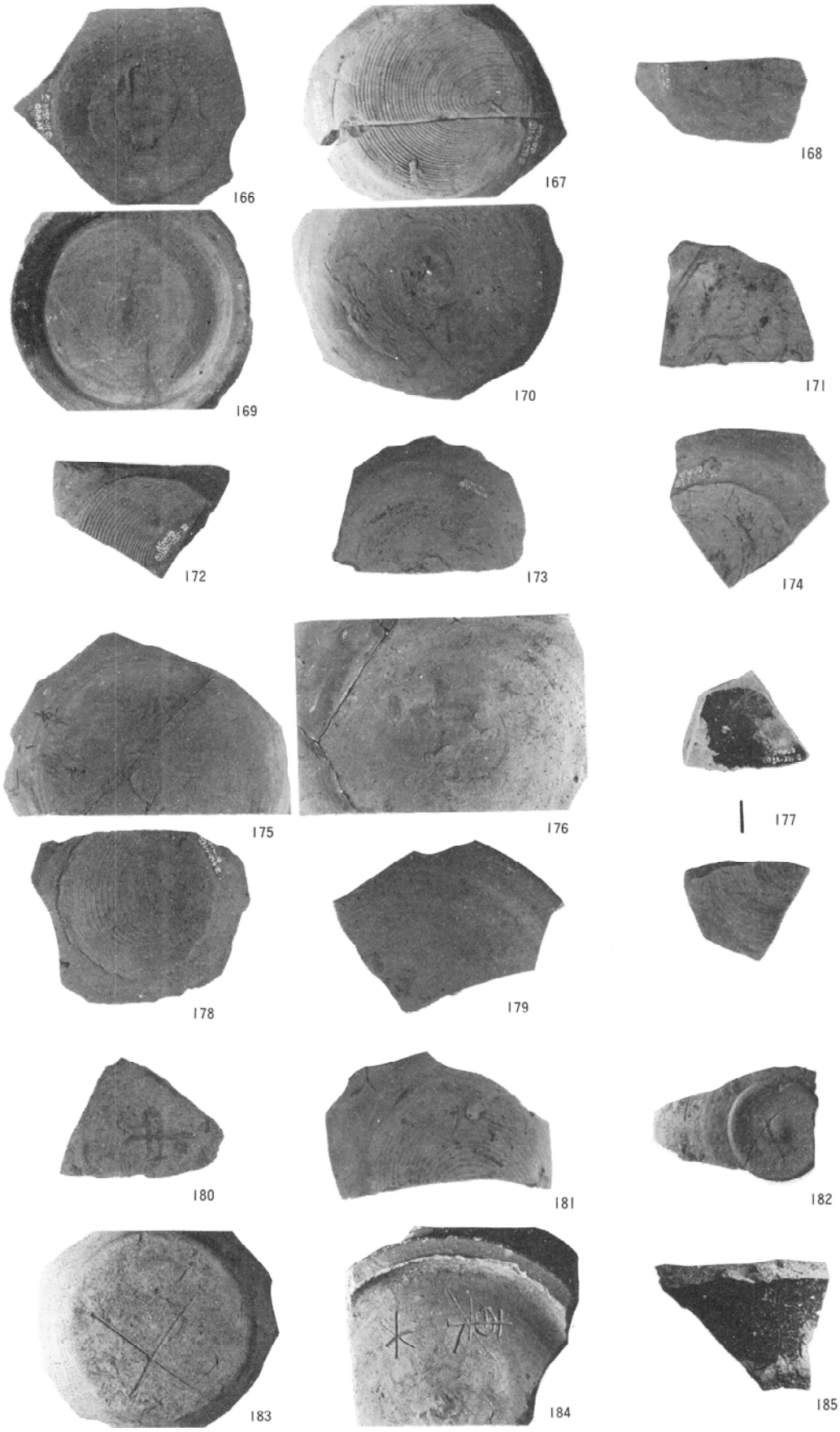
ＳＫ602土壙出土土器(2)（1/6）


129
130
131
132
133
134
135
(2/3)
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147

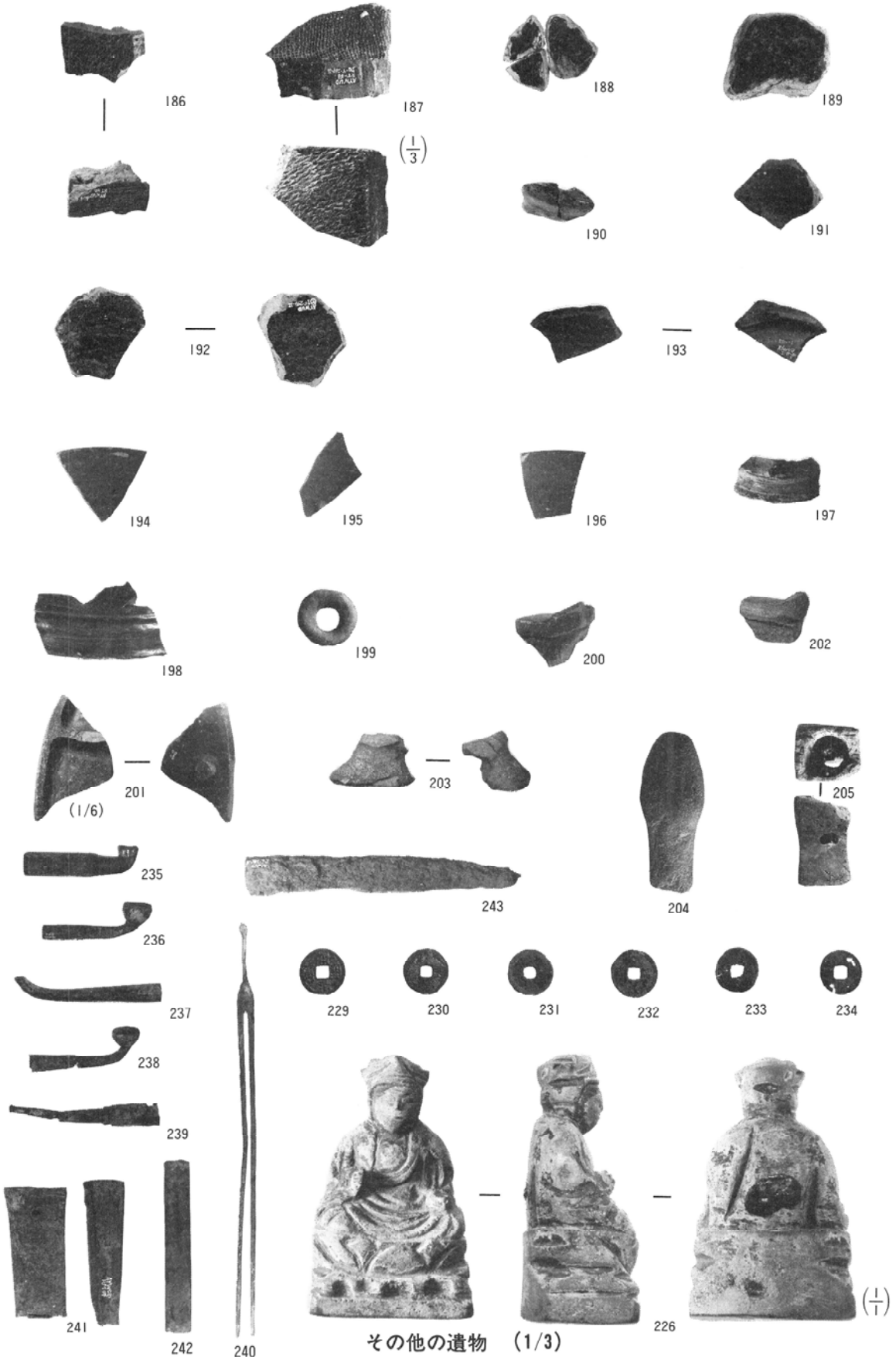
土壙出土土器


148
149
150
(2/3)
151
152
153
154
155
156
157
(2/3)
158
159
160
161
162
165
(2/3)
163
164
(2/3)

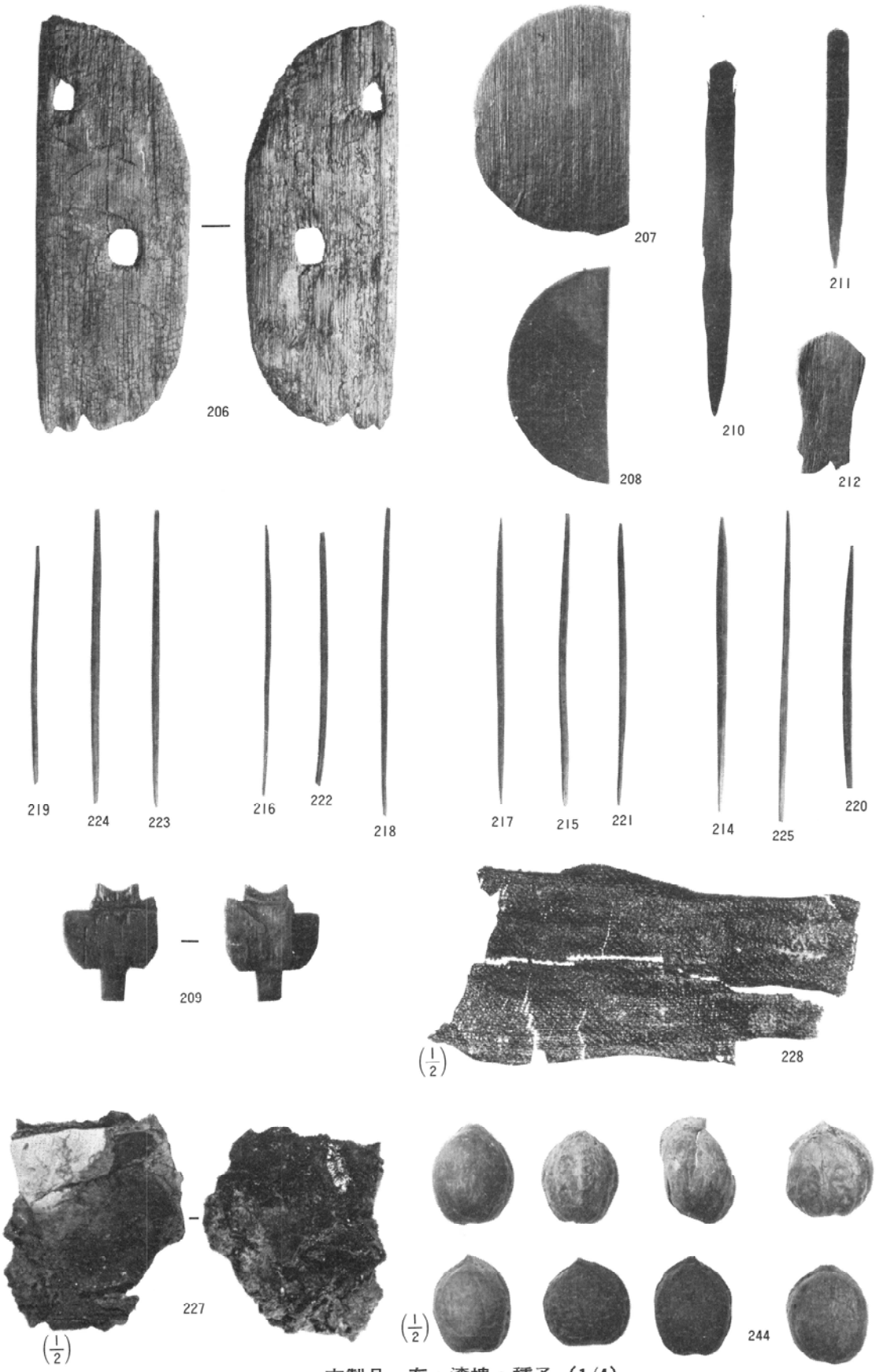
溝状遺構出土土器



墨書・ヘラ描文字・漆付着土器　（S＝1/2）


186
187
(1/3)
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
202
201
(1/6)
203
205
204
243
235
236
237
238
239
241
242
240
229
230
231
232
233
234
226
(1/1)

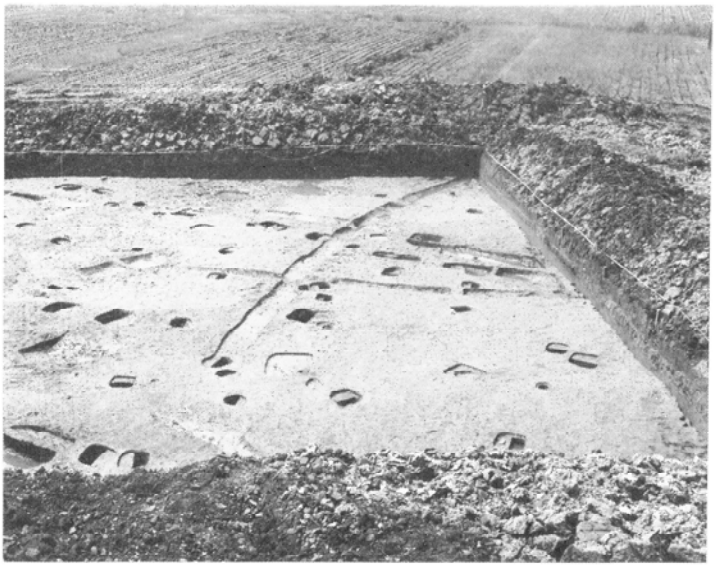
その他の遺物　(1/3)


206
207
208
210
211
212
219
224
223
216
222
218
217
215
221
214
225
220
209
(1/2)
228
(1/2)
227
(1/2)
244

木製品・布・漆塊・種子（1/4）

図版　20　俵田遺跡

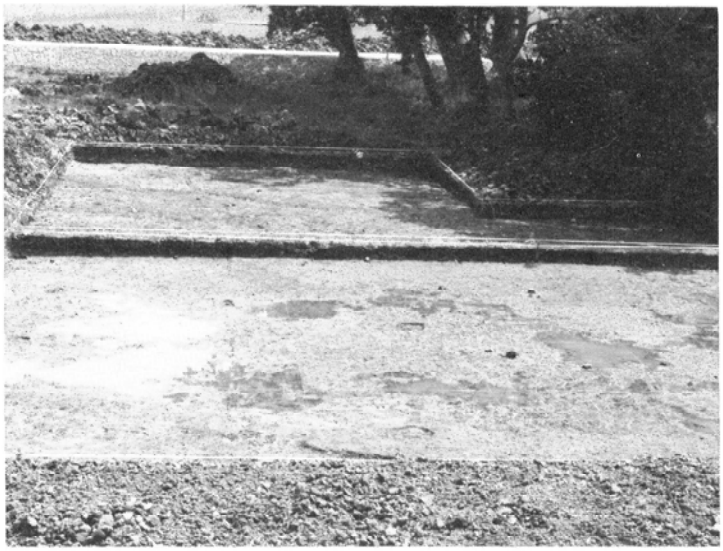
俵田遺跡遠景（南東から）



中央区遺構検出状況（西から）

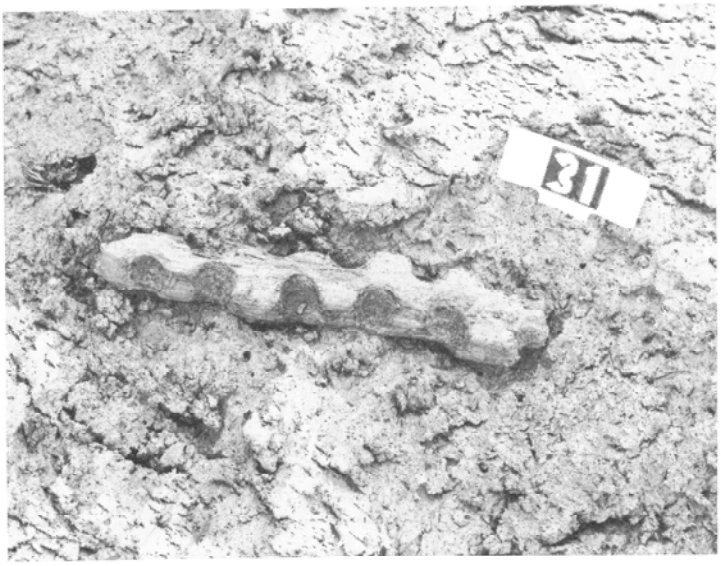
中央区遺物出土状況

図版　21　　俵田遺跡

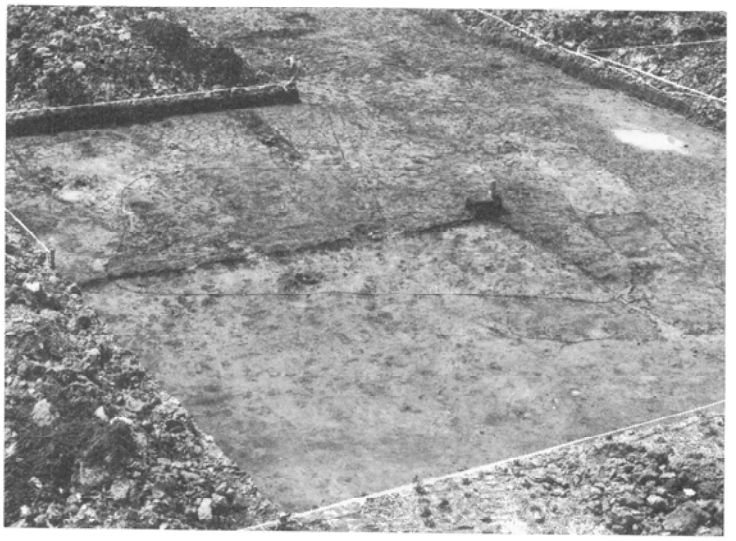


北区面整理状況

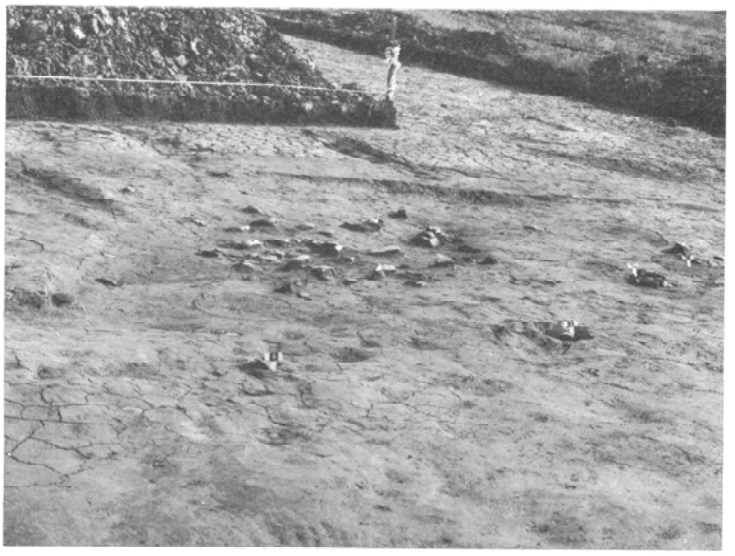
西区発掘状況



火切臼出土状況



ＳＴ１住居跡検出状況



ＳＴ１住居跡土器出土状況

ＳＴ１住居跡全景

山形県埋蔵文化財調査報告書第 64 集

農林事業関係遺跡（2）

後田（うしろだ）遺跡
俵田（たわらだ）遺跡

発掘調査報告書

昭和58年3月25日　印刷

昭和58年3月31日　発行

発　行　　山形県教育委員会

印　刷　　大場印刷株式会社